

一 神 論 者 の 朋 友

ムハンマド・マフディー・ナーラキー

イマーマ（指導者性）について

〈序章〉

ムスリムの間にみられる見解の相違のなかでも特に大きな相違の1つが、イマーマに関するものであるということを知らねばならない。その相違の原因をもたらしたのは、ウマル・イブン＝アル＝ハッターブ以外の何者でもない。というのは、預言者が他界する間際に、「私の死後、皆に戸惑いが生じないように一筆書き残すので、私のところへ筆入れを持ってくるように」とおっしゃったにもかかわらず、ウマルは、「この者は錯乱状態で喋っている。私たちにはクルアーンがあれば十分である」と言った。ウマルのこの言葉を聞いた人々は彼に抗議し、それは喧嘩、口論となった。預言者は不快に思い、「皆、向こうへ行け。一筆残すことはやめることとする」とおっしゃった。

預言者に対し、錯乱状態を結びつけること自体が、まさにクルアーンに反しているにもかかわらず、ウマルが私たちには、クルアーンがあれば十分であると言ったことは誠に驚きである。なぜならば、神は私たちの預言者について以下のようにおっしゃっているからである。「また（自分の）望むことを言っているのでもない。それはかれに啓示された、御告げに外ならない。」（クルアーン；53：3～4）

したがって、ウルマの言葉が矛盾を含んでいることは明らかとなった。なぜなら一方では、クルアーンが神の言葉の明証であることを認め、他方では神の言葉に反する発言を行なっているからである。上述した筆入れのハディースに関しては、非常に多くのスンニー派のウラマーや偉大な学者が自著のなかで引用し、このハディースが真正であることを認めている。とりわけ、信憑性の点では評価の高い《サヒーフ・ムスリム》および《サヒーフ・ブハリー》において、このハディースが言及されている。ムハンマド・シャフラ

スターニーは、スソニー派に固執していたが、このハディースを自著『信徒集団と信仰党派』のなかで引用している。本著において、彼はこのように述べている。「この世に生じた最初の反抗は、アードムに跪くことに対するイブリースの反抗であった。そしてイスラームにおいて生じた最初の反抗は、ウマルの反抗であり、預言者が書き残すことを妨害したことであった。」

いずれにせよ、イマームに関しては様々な見解の相違があり、預言者ムハンマドのウンマは今では73の派に分派している。しかし私たちが指摘すべき主要な相違は、以下のようにいくつかにまとめられよう。

相違点(1)——世界秩序においては、イマーム（指導者）の任命は絶対的に必要である、とシーア派は言う。すなわち、預言者の存在が必然であるように、イマームの存在も必然であり、理性が判断するところでは、イマームを任命することは神にとって絶対的必要である、と主張するのである。他方スソニー派は、イマームを任命することは神にとって絶対的な必要ではなく、むしろ人々がハリーファ（代理人）を任命することが、人々にとっての絶対的な義務であると言う。すなわち任命権は人々に委ねられており、人々が望む人を誰でもイマームにすることができる。さらに、人々にとってイマームの任命が絶対的に必要であるということは《理性》が判断するのではなく、《伝承》によって導かれるのである、とスソニー派は主張するのである。

相違点(2)——シーア派は、イマームをイスラームの根本教義に属するとみなしているが、スソニー派はイマームを第二次的教義に属するとみなしている。

相違点(3)——シーア派はイマームが無謬性を備えていなければならないということに見解の一致をみるが、スソニー派はイマームに対して無謬性を条件付けていない。

相違点(4)——シーア派は、イマームは人々のなかで傑出していなければならないと主張するが、スソニー派は、それをイマームの絶対条件とはみなさない。

相違点(5)——シーア派は、次のように主張する。イマームは神および預言者に指名されなければならない。また神および預言者は、イマームを明言しなければならない。そして、神および預言者によって、そのイマームがクルアーンやハディースに明言されていない限りにおいては、イマームは無意味なものとなる。他方、スニー派は、以上の点を絶対条件とみなしていない。しかし、もし神あるいは預言者が、ある個人に対してイマームを、クルアーンやハディースにおいて明言しているとするならば、神および預言者のそのような言葉を受け入れることは絶対的義務である、とスニー派は言う。

相違点(6)——預言者の死後の後継者の任命について見解の相違が生じている。シーア派は皆、預言者のすぐ後のハリーファが、アリー・イブン・アブータリブであることにおいて一致している。また12イマーム・シーア派は、アリーの後、彼の12人の清らかな子孫が順次イマームであることに同意している。スニー派は、預言者以降、アブー・バクルをハリーファとみなしている。ラーヴァンディーア派の人々は、アッバースを預言者の後継者とみなす。しかしこの派の人々は現在1人も存在せず全く消滅している。この事実そのものがラーヴァンディーア派の無効を説明するに十分であろう。なぜならば、破壊されてしまったり、またその光が全く消えてしまうような瞬間的な真理などありえないからである。

したがって、主な見解の相違が6つの内容から成っていることが明らかであろう。私たちは神がおぼしめすままに、6章にわたってこの内容を12イマーム・シーア派の信条、学説の方法にしたがって証明することとしよう。またその後では、個別の章において12イマーム・シーア派以外のイマーム派および正統ハリーファにおけるイマームがいかなるものかを明確にするであろう。

〈第1章〉

理性的判断にもとづいて、イマームの存在の必要性を証明し、かつ神および預言者がイマームを任命することの必然性を証明することについて

この命題の証明が、全く自明のものであることを知らなければならない。なぜならば、預言者の任命の必然性をめぐって指摘される根本的な理由そのものが、まさにイマームの任命の必然性についての理由として指摘されるからである。預言者は神の命じる義務の設立者であり、神の導きや教義、また命令・禁止の礎を築き、他方イマームは、それらを預言者から引き継いで伝えていかなければならないという違いを除いては、イマームのランクと預言者性のランクは、ほぼ同じである。したがって、預言者が有した権限はすべてイマームも有している。ただしそれは、イマームが預言者の代理人であるという意味の限りにおいてである。

あらゆるイスラーム学者が言うことには「イマームとは、信仰および日常的事象に関して、預言者の代理として、一般のムスリム民衆を指導する権限をいう」。

したがって、以下のように述べることができよう。預言者の存在は必然的であり、理性的にみて、預言者に啓示を与えたということは、神、すなわち神の恵みの必然性に鑑みて絶対的必要である。というのは、神の叡智と命令・禁止を人々に伝え、神の導き、教義、絶対的義務、絶対的禁止を人々に説明し、また賛美される属性、称賛される徳性、非難される行為、邪悪な行為などを人々に教えるために預言者の存在は必然なのである。さらに、現世と来世の事がらを秩序づけ、人々の間で混乱が生じないようにするためにも預言者の存在は必要である。したがって同様に、預言者が築いたことを引き継ぐために誰かを任命することは、神にとって絶対的に必要なのである。預言者の教えが伝えられなかった人にそれが伝えられ、その人からさらにその教えがあるべき方法で広まっていくということが必要なのである。ただ単に預言

者がやって来て、神の導きと教義を伝え、そして人々の間から去ってしまうというだけでは十分ではない。

以上簡単に述べたことを説明すると、人間の創造が、神の恩寵の溢出にもとづいているということは、明確な理由および明証に照らして明々白々である。神の意思は人間が、至福の段階および完全なる段階に上昇することにむけられ、絶対的溢出（根源的存在）は人間が自らの現世と来世の利益に固く結び付くようにして生じる。これらのことがらが実現可能になるのは、人間を正しくかつ幸福な道に導き、腐敗し過ちに満ちた道に向かうことを禁じるような指導者が、人間のために存在するときであるということに疑念の余地はない。そのような指導者があらわれるのは、——それが示す通り——その時代の人々に正しい道への指導者が受け入れられ、その指導者が神に遣わされた援助者でありあらゆる善と悪に関する知識を備えているであろうときである。なぜならば、各時代においてそのような人物がいないと仮定すると、疑いなく、その時代の人々のためには神の意思があるがままに達成されないということになるからである。またたとえ神の導き、教義、合法・非合法のことがらが、人々の間に示されているとしても、神の証人の出現によってその時代の人々に対してもたらされるはずの恩寵と恩恵がその人々にもたらされないことになる。ゆえに、至聖の神が、預言者を遣わし、自らの命令と禁止を人々に広めるために伝えるときには必ず、預言者の代理人もまた神によって任命されなければならない。このようにして人々に対し信仰することを命じ、信仰の教義を世界の隅々にまで広め、ジンと人間のなかでも無法の輩を懲らしめ、そして人々をシャーリアに服従させ、預言者の導く道に従わせるのである。預言者以降、ハリーファやイマームを任命せず、預言者が信仰を人々の間に投げ出してこの世を去るとすると、あるべきかたちでいまだ確立されていないにもかかわらず、それを保持し補佐する者がいないような信仰は、疑いなく、すぐさま跡形もなくなってしまうであろう。また、かたや無法な悪魔が待ち伏せし、世界を破壊する悪魔がその信仰の破壊をもくろみ、

ジンや悪人たちが荒廃と墮落を求め、邪悪な心が怠惰と迷妄を求めているというのに、いかにしてその信仰の足跡が消えずに残るなどということがありえようか。また、たとえそれらの悪魔たちがいなかったとしても、神の証人がいずれの時代にも存在することが《神の恩恵》であり、その時代の人々に対して、神の恩恵が必然であることに疑念の余地はない。したがって、この信仰のためにその人の言葉が完全であるような保持者や援助者を神が任命し、その後には別の人を任命し、またその後には別の人といったように、他の預言者が出現するまで、その任命を行なうことは必然である。各々の預言者の後にその代理人を指名し、重要な任務を帯びた預言者でかつ新しい信仰の長となるような別の預言者を遣わすまで、代理人を任命し続けるという神の方法は、すべての時代を通じて存在しているのである。歴代の預言者たちは各々、前の預言者同様に啓示を受けているのであるが、現実には、前任の預言者の信仰の保持と伝播を行なっていた。預言者が欠ける時代は決してなく、このような引き継ぎは常に絶えることはなかった。したがって、以下のことが証明されたといえよう。すべての時代において、神の証人は地上にあらねばならず、またその証人はいくつかの属性を備えていなければならないということである。たとえば、それは《拝命》、《無謬性》、《卓越性》等であるが、これらは後述に譲ることにしよう。

しばしばこの時点で理性の弱き人々によって、2つの疑問が提起される場合がある。したがって私たちは、その2つの疑問を述べ、それに対する答を示さないわけにはゆかない。

疑問(1)：すべての時代において、神の証人があらねばならないということを私たちは受け入れている。しかしここでの疑問とは、なぜ神の方法が一時代に1人の預言者を遣わし、その後は、特命を受けた別の預言者の時代となるまで執行の代理人を遣わすという方法にもとづいているのか。イマームを絶対的に必要としないために、ある預言者の次に、すぐに別の預言者に啓示を下さない理由は何であるのか。

解答：神が前任の預言者の後に啓示を与える預言者は、前任の預言者が伝えたのと同じ信仰にもとづいているのであり、後任の預言者が前任の預言者の補佐役であるような場合、後任の預言者は、実際には代理となるであろうし、この意味以外のハリーファを、私たちは望まない。

確かに、ハリーファのなかには、預言者である者もあればイマームである者もいた。そして指導者性のレベルは、預言者性のレベルよりも上位にある。また、後任の預言者が、前任の預言者の信仰にもとづいていない場合、むしろ後任者の伝える信仰は、前任のそれに反することとなり、後任者の導きは前任の預言者の導きの破棄を意味することになる。そして必然的結果として、世界は、腐敗と混乱に満ち、殺戮や争いが人々の間に絶えなくなるだろう。世の中においてすべての預言者のあとに、別の預言者が啓示を受け、その第2番目の預言者の信仰が、第1の預言者の信仰を破棄するものとなり、また第2番目の預言者が他界すると、すぐさままた別の預言者があらわれ、第2の預言者の導きを破棄するといったように、以下同様に行き着くところまで続くならば、人々が1つの信仰や導きに落ち着き、それらの教義や法を受け入れるようになるまで、他の信仰や導きによって、また別々の規範や方法によって彼らが指示されることとなる。このような場合には、信仰は決して堅固なものとはなりえず、人々に対して信仰と完全さを備えた原則や不変性がもたらされることはないであろう。信仰や導きを転換することは、非常に困難なことであり、流血や論争といった結末に行きつくことなくして、改宗が達成されることはないであろう。これらのことは、すでに信仰や規範をもっている人々を改宗させるにいたるまでに、特命を受けた預言者の宣教が、どれほどの流血と論争を経てきたかということから明らかになる。したがって、ある預言者が他界したというだけで、別の預言者がやってきて、人々に対し前任の預言者の教えを禁じ、別の教えによって命令を下すとするならば、世間にはつねに争いと腐敗が絶えず、人々は決して信仰と完成のなかに身をおくことがないという状況が必然となる。これは世界秩序の安寧に反する

ことを意味している。

疑問(2)：世界秩序の安寧というものが、つねに神の証人のいるところに見出され、神の証人なくしては、神の恩寵がないであろうと仮定するならば、神の証しが顕現し明示的であるときにかぎって、ものごとが秩序づけられ、人々が現世や自らの信仰について、その証人に照らしてとらえることができることとなる。しかし、神の証人が顕現せずに、人々がその証人を認識することができない場合、——まさに現在、見受けられるのだが——神の証人が単独であるということが、いかなる利得をもたらし、またいかにして世界秩序の安寧と人々に対する神の恩寵が実現されるというのであろうか。

解答：地上に神の証人が存在することから得る恵みは無限であり、神の証人のもたらす利益はとどまるところを知らない。その1つとして、人々は神の証人から真理の探究を行なう。そして、神の証人があらわれるときに、世のなかの諸事を運営するのであり、これは神の証人が顕現しているときの利得である。しかし、たとえ視ることはできなくとも、存在の根源においては、神の証人によって地上にもたらされている利得は非常に多くある。

その1：聖なるハディースに、至高なる神が次のようにおっしゃったと記述されている。

「私は隠れた宝であった。そして私は、自分を誰かに知らしめたく思った。そこで私が認識されるように、人間を創造したのであった。」

上述の聖なる伝承から、人間の創造が、神を認識することに起因していることが明らかとなる。そして、このハディースの文脈が実現されるためには、人間のなかに、神をあるがままに認識できるような誰かがいなくてはならない。そして、神の叡智をあるがままに得るということは、預言者あるいはイマームのレベル以外のものによっては達成されえないであろう。したがって、人々の間に神を完全に認識する人がいるかぎり、つねに地上において、神の証人が絶えることはないのである。

その2：神の証人が単独であるということは人々に対する恩恵と恩寵であ

る。というのは、地上における神の証人の存在は、幸福と恵みを授け不幸と災厄を防ぎ、ジンや悪人たちが市中で絶対的な権力をふるうことを軽減し、人間の姿をした偽善的な悪魔の人々に対する権威を、なきものとする原因となっているからである。このような観点から、預言者の清らかなる家族の伝承に、次のような伝承がある。

「もし地上に神の証人が存在しなかったのならば、いかなるときも大地は地上の民とともに沈んでしまう。」

この点に関する説明としては、神はいくつかの益をもたらすために、悪魔たちを創造し、人間たちに対する覇権を彼らに与えたのである。人々に対する悪魔の支配や行ないが増せば増すほど、神の御加護は人々から断たれてしまう。他方、悪魔の支配や行ないが少なくなれば、神の御加護は、より一層人々にもたらされるであろう。疑いなく、神の証人は、悪魔と反対に位置し、一方の行ないが増せば、他方の行ないが減るのである。悪魔の首領の仕業が世界全体に到達するのと同様、唯一神信仰者の長、すなわち神の証人の行ないが、世界全体に行きわたる。悪魔の仕業は地上を暗闇で覆うが、他方、神の証人の行ないは、地上を光まばゆいものとするのである。

要するに、地上において神の証人が存在するのは、悪魔の一团に抗するという理由による。これにより、地上における悪魔の仕業はより少なくなり、神の御加護と恩寵が、より多く下されることとなる。もし神の証人が地上にあらず、悪魔たちに対抗する者が全くいなかったとするならば、暗黒が地上全体を覆うであろう。そしてこのような事態となった時には、すぐさま神の御加護と恩寵は断たれるであろう。本質的に純粹で聡明な人は、この意味を全く容易に理解するばかりか観照するのである。

その3：大方の人々にとって、神の証人は不可視である。しかし、ある一部の人々は神の証人のもとに馳参じ、自らの難問を神の証人に問うのである。そしてたとえ、大方の人々がいっせいに過ちを犯すとしても、そのような人々はある方法でその過ちを回避する。——それは大衆には明らかとはならない

のだが。

したがって、以下のことが明らかとなった。イマームが顕現しているとき恩恵があるのと同様に、ある一団にはたとえ不可視であっても、神の証人が単独であることに恩恵が見出される。神の証人の顕現のもたらす恩恵の方がより多く、顕現の状態が人間一般にとって最もよいにもかかわらず、神の証人が不可視であるということは、その人間の能力が欠如しているという理由にほかならない。

これに関する説明は、以下の通りである。神のあふれんばかりの恩寵の源において出し惜しみするということはなく、むしろ人間の状態にとって最もよいことを、至聖の神は実行なさるのである。しかしながら、すべての事物が、預言者性やイマームのレベルに値するとは限らない。預言を授けたり、イマームを実行するといった重要な事がらに値する事物が創造されるには、幾世代もめぐらなければならない。したがって神の証人が顕現するとしても、神学においては、その証人のあとに続いて証人があらわれない、すなわち預言者性やイマームにふさわしい事物があらわれないであろうことは明らかである。すべてが腐敗と無知に委ねているような時代の人々は、長期にわたって神の証人が顕現するには値しないのである。というのは、時には神の証人を、抹殺せんとするたくらみがあるからである。ゆえに、神の証人が地上からいなくならないように、神はその証人を腐敗した人々の視線から隠しているのである。

以上述べたことにより、時代を預かる者の存在の証明に対して理性的な根拠が明らかとなった。そして、後章において、その証明に関する伝承の根拠もまた、誰にも疑いの残らないような方法で説明されるであろう。

スニー派が言うことには、「イマームを任命することは、理性的にはかって神にとって必然的ではない。むしろ、イマームを任命することは伝承の観点からみて人々にとって必然的である」と。スニー派の論拠は預言者の死後、預言者の埋葬は最も重要でかつ絶対的な義務であったにもかかわらず、

預言者の埋葬を放置して、教友たちが合議し、アブー・バクルをハリーファとして任命したことにある。そしてムスリムの《合議》を明証とみなしている。したがって《合議》に照らしてアブー・バクルの代理就任が必然的であることを明らかにしている。しかし、この論拠は究極的には弱いものである。というのは、スンニー派が明証であると主張するところの合議は、ムスリム全体というよりも、イスラームの指導者全員が合意するときに成立するものである。しかし、アブー・バクルを選出したあのかの合議には、アリー・イブン・アブー・ターリブ、ハサン、フセイン、サルマーン、アブー・ザッル、ミクダード、アッマール等の面々が含まれていなかった。よってたとえスンニー派の論拠がその合議にあったとしても、預言者が逝去なされたときには、その合議はいまだ成立していなかったことになる。それにしても、預言者の埋葬という最も重要な義務を怠ったとは、いかなることであろうか。

しかるに、もし預言者の亡なる前に合議が成立していたとするならば、スンニー派の説明は筋が通るであろう。もし預言者の埋葬をなおざりにし、ハリーファを選出するために赴いたことが、別の根拠にもとづいているならば、たとえば、その根拠が理性的な根拠であるとする、それはスンニー派の信条に反するものである。なぜならば、スンニー派は、《理性》はイマームの任命の必然性について、判断を下すことはないとは主張しているからである。またその論拠が《合議の伝承》以外の伝承、たとえばそれが預言者から伝えられたハディースといった類のものであるとするならば、伝承されたとするそのような虚偽のハディースに私たちは注目しない。また、スンニー派としても、そのような主張はしないであろう。

〈第2章〉

イマームがイスラームの根本教義であることについて

このことは全く明白なことである。なぜならば、預言者の伝えた信仰の永続性がイマームの存在に依拠しているからである。そして預言者のあとに、その代理人がいらないとするならば、預言者の伝えた信仰が確立することはないであろう。そしてイマームが、主たる根本教義であることに疑念の余地はない。また、ハディースもこれを証明している。そのハディースというのは、預言者から伝えられ、シーア派、スンニー派を問わずムスリム全体が受け入れており、いろいろな分派の教義書のなかで、数多くの経路をたどって伝えられているものである。そのハディースとは、「自らの時代のイマームを知らずして死にゆく者、そのような者の死は、無明時代の輩の死のようなものであろう」というものである。

時代を通して驚くことといえば、スンニー派は、イマームを二次的教義とみなしているにもかかわらず、非常な嫌悪と憎悪をシーア派に対していっており、そればかりでなく、スンニー派の多くは、シーア派のムスリムを殺害したり捕虜として捕らえることを許している。イマームを二次的教義であるとみなすとするならば、スンニー派四法学の各々が互いに異論を唱え対立している他の二次的教義の諸問題と、いかなる相違があるというのであろうか。（二次的教義である）イマームに関してスンニー派の主張に異論を唱える者が、抹殺されねばならないか、あるいは嫌悪と憎悪の対象となるというのであれば、ハナフィー派もシャーフィー派もマーレキー派もハンバリー派も互いに抹殺せねばならないとみなし、非常な嫌悪と憎悪をいいてしかるべきである。

シーア派がイマームを根本教義とみなしている点に鑑みると、たとえシーア派がスンニー派に対して憎悪感をもっているとしても正しいことであろうことは、まさにその通りである。そしてことの真相といえば、スンニー派の

学派は、神や預言者の言葉に依拠している学派ではなく、自分勝手に言っているにすぎず、よってスニー派の主張の基盤は全く根拠のないものである。

〈第3章〉

イマームについて、無謬性が絶対条件であることについて

イマームに対して無謬性が前提となっていることは自明である。なぜならば、イマームのレベルが、預言者性のレベルの類であることが明らかとなったからである。したがって、預言者の無謬性を証明する論拠のすべては、それ自体でイマームの無謬性を証明している。イマームは、神の導きであるシャリーアの保護者であり、預言された法の保護者であるというのに、そのイマームが無謬でなく、誤りを犯すということがありえようか。イマームから無謬が生じ、自らがシャリーアに反することを行なうとすれば、いかにしてシャリーアの保護者たりえようか。

人々がイマームを必要とすることは、以下の理由によるものである。人々は行為や知識について誤りを犯す可能性があるので、彼らが誤りを犯さないように守ってくれる誰かがいなくてはならない。したがって、イマームに、誤りを犯す可能性があるとするならば、そのイマームは、また他のイマームを必要とするであろう。その2番目のイマームも誤りを犯す可能性があるならば、第3のイマームを必要とし、同様にしてこれは無限に続きどこにも到達することはなかろう。したがってイマームとは、無謬であり、誤りを犯す可能性のない人でなければならないのである。

さらに、もしイマームに無謬性がなく、イマームから誤謬が生じるとするならば、一般の人々が誤りを犯すよりも状況は悪化しよう。というのは、イマームは一般の人々よりも知識があり、より公正であるので、誤謬による腐

敗と罪惡は、イマームのもとではより明白となる。このことにもかかわらず、イマームが誤りを犯すとするならば、それはあらゆる天賦の資質のなかでも最惡のものとなろう。というのは、知者の誤りは、無知者のそれより醜惡なものであり、最も知性のある者の誤りは、そうでない者の誤りより、忌むしいものだからである。

またさらに、イマームが誤りを犯す可能性があり、イマームから誤謬と罪惡が生じるときには、イマームを否定し、イマームの言葉を拒絶しなければならない。しかし他方では、イマームとは、すべての事がらにおいて服従しなければならない人物なのである。それは至高なる神が、「アッラーに従いなさい。また使徒とあなた方のなかで権能を有する者に従いなさい」（クルアーン；4：59）とおっしゃっているように。そしてこの聖句の「権能を有する者」とは、任命されたハリーファたちやイマームたちを指すのである。イマームの言葉を拒絶することと、イマームに絶対的に服従することは、互いに両立しない。したがってイマームは、無謬性を備えてなければならず、イマームから誤謬が生じることはないのである。この論題に対する証明理由は際限なくあるが、見識者にとっては以上述べたことで十分である。

〈第4章〉

イマームが一般大衆よりも卓越していなければならないということの証明について

この命題の論拠は以下の点に依拠している。イマームが一般大衆より優れていないと仮定すること、あるいは、イマームがある人々と同等であると仮定すること、これらは無効である。というのは、まず《同等の2人の者のうちの1人》を選好することはありえないからである。すなわち自由な決定者は、自分にとって等しい2つの事がらに対して、そのうちの1つを優先的に

選択することはない。むしろ一者を選択するためには、どちらかの一者を選好する理由がなければならない。これは、學術書においては確固たる論拠によって証明されており、あらゆる賢者が自明となみなしており、理由の提示の必要のない全く明白なことである。

また、一般の人々のうちのいく人かが、イマームより卓越しているかもしれないと仮定すること、これも無効である。というのは、理性は優越していない者を優先することの悪弊について判断を下しており、卓越した者よりも卓越せざる者を優先することが無効であることについては、賢学者の間で意見の一致をみている、という理由による。そしてこれは、確固たる論拠によって証明されてきている。またこれは自明であり、理由の提示の必要もないことなのであるが、卓越する者よりも卓越せざる者が選好されることの悪弊は、明らかにクルアーンに反することでもある。それについては以下のごとく、至聖の神がおっしゃっている。

「真理に導く方と、自分が導かれなければ道を見出せない者と、どちらが従うのに値するのか。あなたがたはどうしたのか。あなたがたはどう判断するのか。」(クルアーン；10：35)

また別の箇所では次のようにおっしゃっている。「知っている者と知らない者と同じであろうか。(しかし)訓戒を受け入れるのは、思慮ある者だけである。」(クルアーン；39：9)

したがって、イマームが一般大衆よりも卓越していなければならないことが証明された。

〈第5章〉

イマームが神あるいは預言者に任命されなければならないということの証明について

イマームは、神および預言者から任命されるのであり、イマームの任命は人々の手には委ねられていない。

この命題に対する論拠はおびただしく存在する。しかしながら、ここではいくつかの論拠をあげることで十分であるとしよう。

論拠(1)：イマームについて無謬性が絶対条件であることは理解されるところとなった。またその無謬性というものが隠されているものであり、人々がそれに関して知ることがないということには疑いの余地がない。したがって、イマームの任命は、隠れたる事がらに関する情報と、内面的な事がらについての叡智を有する誰かの手に委ねられなければならない。このようなことができるのは神とその使徒に限られる。

論拠(2)：もしイマームの任命が、人々の手に委ねられていたとすると、イマームの解任もまた、人々に委ねられていることとなろう。したがって、イマームが人々の望みと反するような行動をとるときには、人々がイマームを解任する権力をもっているということが必然となる。これはイマームのレベルにそぐわない。

論拠(3)：預言者のとるべき道について考えてみると、預言者がこの世を去るにあたり、自分の代理人を任命していないということがありえないということは、だれしもが確信するところである。預言者が、代理人を任命しないなどということが、いかにしてありえようか。預言者とウンマのあり方といえ、預言者はウマノに対して親身であり、幸福のもたらされることを願って、ウンマの人々のために、大局的なことから部分的なことに至るすべて、排泄に関わることもまでも説明するといったものであったにもかかわらず、代理人の任命をウンマの人々のためにしないということが、いかにしてありえ

ようか。しかも預言者の代理人の任命は、何にもまして重要な問題、目的であり、ウンマの人々に関わる事がらを秩序づけるためには、代理人を任命すること以上に最適の策はないのである。

論拠(4)：シーア、スンニーの両派とも、イマーマがムスリムの信仰および現世に関わる事がらについて、預言者の代理としてムスリムの一般的指導を行なうことを意味するということに、見解の一致をみている。ある人〈B〉を、〈A〉という人の代理人にするということは、代理人にしようとする人〈B〉を、〈A〉自身が代理人として選ぶときに限られるということに疑いの余地はない。もし〈A〉本人ではなく他の人が〈B〉を代理人と選ぶとするならば、〈B〉を〈A〉の代理人とすることは正しくないであろう。したがって、預言者の代理人とは、預言者がその人を代理人と任命したときに、預言者の代理人となりえるのであって、ウンマがその人を預言者の代理人として選ぶというならば、その人を預言者の代理人とすることは正しくないであろう。そしてこの意味を、アブー・バクルの父の《アブー・クハーファ》もわかっていた。周知の通り、アブー・バクルが人々によって代理人に任命されたとき、アブー・バクルは、1通の手紙を自らの父《アブー・クハーファ》に書いた。それは以下のような内容である。

《本書簡は、預言者の代理人より父アブー・クハーファに宛てたものである。

「さて、私による代理制に、実に人々が満足しました。したがって本日、私は神の代理人となります。もしあなたが私のもとにいらして下さるならば、あなたにとりまして非常に良きことでありましょう。」

アブー・クハーファがその手紙を読んだ時、その手紙をもってきた者に尋ねた。

「人々がアリーを代理に就かせようとしなかった理由は、一体何であるのか。」

配達人は以下のように答えた。

「アリーは年齢が若く、またクライッシュ族やその他の部族の重鎮を多く殺しています。アブー・バクルは、アリーより年上であるという理由で、彼を代理人としたのです。」

アブー・クハーファが言った。

「もし、指導者性や代理者性の問題が年齢によるものとすれば、私はアブー・バクルよりも年長であるがゆえに、私がより適しいということになる。全くもってアリーを虐げ、彼の権利を奪ってしまったものだ。私たちのいるところで、預言者はアリーと盟約を結び、そして私たちにアリーと盟約を結ぶよう命じたというのに。」

そしてアブー・クハーファは、アブー・バクルの手紙に対し、以下のような内容の返事を書いた。

「おまえの手紙を受け取り、その主旨はわかった。えい！馬鹿者よ。おまえの手紙には、互いに矛盾したことがいくつもある。いったんは、神の代理人と尝试してみたり、また別のところでは、預言者の代理人と尝试してみたり、またさらに、人々は私に満足していると言ってみたり。」

このように、アブー・バクルに対して、この忌まわしい事がらを戒めた。》

〈第6章〉

イマーム・アリー・イブン・アブー・ターリブが預言者の直接の後継者、および代理人であることの証明について

現世と来世の幸福を求める者よ、以下のことを知らなくてはならない。預言者の代理人であるためには、《無謬性》《卓越性》《神および預言者からの拜命》ということが絶対条件であることが、確証および明白な証拠によって明らかになったということ。また、この3つの条件のいずれもが、アリー・イブン・アブー・ターリブに備わっており、彼以外の者には備わっていない

ということ。これに加えて、アリーは、預言者およびイマーム以外の者は起こすことのできない《奇跡》、聖跡、超人的行為を行なってきた。しかし他方、アリー以外の3人のハリーファは、指導者性や代理者性のレベルに適しくないようないくつかの命令を下している。ゆえに、本章において、イマームがアリーにのみ限られるということを、5つの方向から証明することとしよう。1つの方法による証明だけでも十分ではあるが、その5つの各々を述べることにしよう。そのようにすれば、導きをもとめている人々に対して、アリーが預言者の代理人であることは、疑念の余地などあるものではなく、またそれを否定する人々の否定の理由が、党派精神や敵意以外の何ものでもないということが明らかになる。

1. 無謬性にもとづく証明

賢者あるいは理解力をもっている者なら誰でも、アリー・イブン・アブータリブの無謬性に関し、何らの疑いをもっていない。それは以下のいくつかの理由による。

理由(1)——イマームにおいて《無謬性》が絶対条件であること、さらに、預言者の死後、アリー、アッバース、アブー・バクルの間でイマームの件について論議が交わされたということは、周知のことである。誰一人として、アッバースとアブー・バクルに対して無謬性が備わっていることを断言するものではなく、アッバースとアブー・バクルに無謬性がないことでは、すべての党派が同じ見解を示した。したがって、無謬性はアリーにのみ限られるであろう。

理由(2)——非常に多くのアリーの敵対者や、またその人々のアリーに対する非常に激しい憎悪は、つねにアリーのあらさがしを行ない短所を見つけようとしていた。アリーの短所を暴露することに全神経をかたむけ、真剣そのものであった。しかし、それにもかかわらずアリーからは、好ましからざる性質は全く伝えられず、それどころかアリーの味方も敵も皆、アリーは知識

においても行為においても、決して過ちを犯されなかったということで見解が一致している。そして、もし無謬性が習慣的属性としてアリーに備わっていないければ、そのように決して過ちを犯さないなどということが生じなかったということに疑いの余地はない。

理由(3)——無謬性の根拠は《清浄》の聖句のなかにあり、あらゆる見解の一致をみているように《預言者の聖家族》の高貴なることがらについて、啓示が下され、クルアーンの聖句に次のようにある。

「家の者たちよ、アッラーはあなたがたから不浄を払い、あなたがたが清浄であることを望まれる。」(クルアーン；33：33)

《Rijs (不浄)》という語についている定冠詞は、《類》あるいは《集合概念》をあらわし、いずれの場合においても一般概念をあらわす。したがって、表層、深層のいずれの穢れにも含まれ、その穢れとは、不純と不浄からなる。上記の聖句によれば、預言者の聖なる家族は、表層、深層のあらゆる不純を清めている。深層の不純とはまさに《反逆心》をいう。これに関してはスニー派の学者もシーア派の学者も様々な経路にもとづき、この聖句が、預言者の聖なる家族の5人に限られていると述べている。シーア派の主張を述べる必要はないであろうが、この点を完璧に明らかにするために、スニー派の伝承集のなかから二、三の根拠を述べることにしよう。

スニー派のなかで、最も偉大な伝承集である《ブハーリー》と《ムスリム》の伝承のなかに、《アイーシャ》が正しく伝えるところのものとしての以下のような伝承がある。

《アイーシャいわく、「ある日の朝、預言者が外に出てきて、黒い羊の毛でできたアバーが預言者の肩にかけてあった。突然イマーム・ハサンがいらっしゃると預言者は彼をアバーの中にくるんだ。そしてイマーム・フセインがいらっしゃると、また預言者は彼のアバーの中にくるんだ。またその後イマーム・アリーがいらっしゃると、彼もまたアバーのなかにくるんだ。さらにその後ファティマがいらっしゃると、預言者は彼女もアバーのなかに

くるんだ。その後、この《清浄の聖句》を彼らのために誦んだ」と。》

スンニー派の代表的な注釈者の1人であるサアレビーによれば、アブー・サイド・フダリーからの伝承として、預言者が以下のようにおっしゃったとある。「この聖句は、5人のために下されたものである。すなわち、私とアリーとファーティマとハサンとフセインのために。」

またアフマド・ハンバルによれば、《ウンム・サリマ》からの伝承として、ウンム・サリマは以下のように言った。

《預言者が私の家にいらっしゃると、そこへファーティマがいらっしゃった。大釜のなかにおかゆができていた。預言者は、ファーティマに夫と2人の子供を呼ぶようにとおっしゃった。そして、アリーがハサン、フセインと一緒にいらして食膳に座り、そのおかゆを召し上がった。清浄の聖句が下された。そこで預言者は、その5人を自らのアバーにくるみ、手を空にかかげて言った。「神よ！ この者たちは、私の近親者です。この者たちから、あらゆる穢れを取り除き給え。そしてこの者たちの穢れをお清め下さい。」》

さらに《ウンム・サリマ》は言った。

《私は部屋をのぞき込んで申し上げた。「預言者よ、私もあなたがたと一緒にいるでしょう。そして、私も聖家族の一員となるでしょう。」預言者は、2回にわたっておっしゃった。「おまえの意図は、善である。」》

2. 卓越性にもとづく証明

アリー・イブン・アブー・ターリブが、いかに卓越しているかについては、全く明白であるので、それに関する説明をほどこしたり、根拠を提示する必要はないであろう。アリーが最も高貴であることは、明かな証明をする以上に自明なことである。アリーの敵は、憎悪と執念によって、アリーの美徳を蔽い隠すことに全力を注いだ。またアリーの味方は、畏敬の念からアリーの美徳を表立てないように、真摯な努力を払った。これらのことにもかかわらず、アリーの美徳や偉大さは、あらゆる地域を席卷し、彼の称賛に値する輝

かしい行為は、生きとし生けるものをすべて包み込んだ。アリーに異論を唱えている文献や物語であれ、アリーを支持する文献や物語であれ、アリーの完全さと美德を数えあげている。また、内容が無効な著者であれ、真実を語っている著者であれ、一致して彼の奇跡と偉業を列挙している。

彼の称賛に値する行為や美德によって、飾られていない書物がいずれにあるだろうか。彼の美德とありあまる能力の宝によって、飾られていない記録がどこにあるだろうか。彼の称えられるべき属性について、述べていない書物を見たことがない。彼の称賛されるべき善行を、言い伝えていない書物に出会ったことがない。

スンニー派の碩学であるイブン・アブー・アル＝ハディードが以下のように述べている。

「アリーの卓越性というものは、それを詳述することに反対することが、その者をかえって醜悪にみせてしまうほどのものである。その人物に敵対する者までが、その人物の偉大さを認め、称賛することをあえて否定しないような、そのような人物について、何ということができようか。ウマイヤ家は、東西のイスラーム世界を制覇したにもかかわらず、アリーの御光を消すことに最大の努力を払い、多くの伝承が、アリーの欠点や短所を著すために書かれた。そして説教台においては、アリーを呪い、シーア派の人々もしくはその支援者に対しては、ある者を殺害したりまたは追放し、またある者を投獄したりした。人々がアリーのすばらしさを言い伝えることを禁じ、アリーの名前を口にすることまでもハラームとみなした。ウマイヤ家が禁じようと努力すればするほど、アリーの名声は一段と高まり、彼のすばらしさは伝え広まって、アリーの地位はより一層高まった。それは麝香の香りをいくら隠そうとしても、その香りを隠すことができないのと同様であり、また、手で遮るだけでは隠すことのできない、太陽の光のようであり、そして、盲の目には見えずとも他のいくつもの目が観察している明るい昼間のようなものである。」

アリーが非常によく自画自賛しているといつて、アリーを批判しているスソニー派のある人々に答えて、再びイブソ・アブー・アル＝ハディードが言うことには、「あらゆる雄弁家たちの見解の一致するところでは、アリーは世界中で最も雄弁であり、弁舌がたつた。たとえ世界中の雄弁家たちが一堂に会したとしても、アリーの卓越さの10分の1さえも説明する力はないのである」と。

スソニー派の人々もまた、アリーの卓越性に関しては文句がない。そして次のように言う。「あのお方は、精神的、肉体的完全さにおいて、また他の事がらにおいてすべての教友のなかで最も優れていた」と。しかし次のように言う者もいる。「3人のハリーファの方が、別の意味においてアリーより優れている。その意味とは、彼らの方が神に報いられるような善行が、アリーより多いということである」と。私は、このようなことが、どこからスソニー派に伝えられたのか知らないが、報償をいかに多く受けるかは知と行為の価値の程度によるにもかかわらず、彼らがそのように主張する根拠は一体何であるのか。

要するに、探究を重ねていけば、アリーの卓越性というものは、シーア派、スソニー派のもとばかりでなく、イスラーム以外の宗教、すなわちユダヤ教やキリスト教の観点からも証明されることが明らかとなろう。まず手始めに伝承のなかで、両派がともにアリーの卓越性を言い伝えている伝承のいくつかについて述べることにしよう。そしてそれらの伝承を列挙したのちに、一つ一つの美德に説明を加えよう。すると、あのお方（アリー）が、一つ一つの美德において群を抜いていて、あらゆる美德のもち主のなかでも、筆頭であるということが判明するであろう。しかし、この論文の紙面には限りがあるので、いくつかの伝承を例証することで満足することとしよう。

アリーの美德と完璧さのすべてを述べることのできる能力は、誰にも備わっていない。というのは、シーア派、スソニー派の両派の学者がアリーの美德について書き著し、著作を残しているにもかかわらず、アリーの美德につい

ての10分の1すら、また膨大にあるうちのほんの少しですら伝えていない。スソニー派は、まさにその偏見ゆえに、彼ら自身の書物のなかでは、アリーの美徳のほとんどについて何も伝えていない。

伝承(1)——ハワーリズムーは、スソニー派の碩学の1人であるが、以下のように預言者がおっしゃったと伝えている。《「神は、私の兄弟であるアリーに対し、数え切れないほどの美徳をお与えになった。したがって、アリーの卓越性を1つでも述べ、彼を認める人は誰でも、神はその人の罪をお許しになる。また、後代に残るようにアリーの卓越性について1つでも書き綴る人には、天使がその人のために神に許しを乞うであろう。アリーの卓越性を1つでも耳にした人には、それを聞くより以前に犯した罪を、神はお許しになるであろう。そして、アリーの卓越性を1つでも見た人には、それを見る以前に犯した罪を、神はお許しになるであろう。そして預言者は、引き続き次のようにおっしゃった。「アリーに顔をそむけないことは、勤行である。アリーを支持し彼の敵を遠ざけるような人の信心しか、神は受け入れない。」》

伝承(2)——再びハワーリズムーが、預言者が以下のようにおっしゃったと伝えている。

「たえすすべての木々が筆となり、すべての海がインクとなろうとも、そしてあらゆるジンが数え上げる者となり、人間のすべてが書き留める者となろうとも、アリーの美徳を数えきる能力はない。」

伝承(3)——イブソ・ムガーズィリー・シャーフィーは、スソニー派のなかでも最も偉大な学者の1人であるが、『マナーキブ』のなかで、アブー・アイユーブからの伝承を、以下のように伝えている。

《預言者が病気となったとき、ファーティマが見舞いに訪れたが、その時、預言者は非常に弱っていた。ファーティマは、自分の父親がそのように弱っている状態を目前にして、泣きはじめた。預言者は、ファーティマに次のようにおっしゃった。「ああファーティマよ。誠に、至高なる神は、最初に地上を眺められて、おまえの父親を地上の民からお選びになり、その者を預言

者とした。次の段階としては、地上の民を眺められて、おまえの夫をお選びになり、おまえとその者を結婚させ、私の後継者にするようにと啓示を下された。ファーティマよ。おまえが神のみもとで祝福されているからこそ、知性、謙虚さ、信心の上で最も優れた偉大な人物と、おまえを結婚させたということがわかっているのか」と。》

伝承(4)——アフマド・ハンバルが『ムスナド』の《教友の美德》という章において、またさらにアブー・ナイーム・ハーフェズが『ヒルヤト・アウリヤー』のなかで伝えるところとして、「預言者は、アリーを信者たちのヤアスーブと呼んでいた。(ヤアスーブとは蜂の長のことである。)これは、アリーが信者の長であり指導者であるという意味である」と伝えている。

伝承(5)——一般の人々も専門家も伝えるところによれば、預言者はある日、アリーにおっしゃった。

「キリスト教徒がキリストについて述べたようなことを、ムスリムがおまえについて言うのではないかと危惧したならば、私はいつもおまえについて何かを言っていたであろう。そのように私が述べたあとには、おまえが行き交う人々は皆、おまえの足跡の土を手にとり、おまえの手からあふれた水をとろうとするであろう。しかし、私はおまえのものであり、おまえは私のものである。おまえは私から引き継ぎ、私はおまえから引き継ぐ、おまえは私にとって、ムーサーに対するハールーンのようなものだ、ということ十分である。」

伝承(6)——サヒーフ・ティルミジーの『ジャーミア＝ル＝ウスूल』は、スンニー派のなかで信用のおける著書の1つであるが、そのなかには、「友愛」について次のように伝えられている。

《預言者が、教友たちとの間に兄弟愛を結んだとき、アリーは預言者のところへ赴き、次のように言上した。

「預言者よ。教友たちの間に兄弟愛の契りを結ばせたというが、私は誰とも兄弟にしなかったのですか？」

預言者はおっしゃった。「アリーよ。現世においても来世においても、おまえは私の兄弟である。教友たちは、おまえと〈比肩する者〉ではない。」》

この伝承が、アリーがすべての教友たちよりも卓越しているということを明示しているということに疑念はない。また、アリーの卓越性を立証している伝承が、シーア派、スソニー派の両派に限りなくあるが、この論文の紙面には限りがあるので、この程度で十分としよう。

ところで、《美德があてはまる一つ一つにおいて、アリーは〔以下、原文欠如〕》これに対する説明は、美德とは、そのような属性を民衆のもとに有していれば、称賛に値し、神のもとに有していれば、報償に値するようなすべての属性を指している。この属性というのは、その人物の本質に属しているところの内的属性か、もしくは、本質に内在するのではなく、外的事物に依拠する外的属性である。

内的属性というのは、2つの部分から成っている。

まずその1つは、精神的属性である。これは靈魂に付随するもので、靈魂は2つの能力を有している。そのうちの1つとは、思考力および認識力であり、この能力によって事物を認識する。もう一方の能力とは、実践能力であり、その能力によって善き性質を獲得し、悪しき性質を廃棄する。したがって精神的属性は、以下のように2つの部分にもとづくといえる。知と認識といった知力に関わる属性と、勇氣、寛大さ、確信、信念、忍耐等といった実践力に関わる属性である。

もう1つの内的属性とは、身体的属性であり、それは宗教的行為や体力等といった身体に付随する属性である。

外的属性は、靈魂や身体に内属するものではない。そして、これもまた2つの部分から成る。すなわち、先天的なものと、後天的なものである。

以上が、人間が有する諸属性を分類する枠組みであり、美德の原因となるところの枠組である。要するに、アリーがもつこれらの属性は、預言者に次いで、いずれの被造物の性質よりも、高貴ですぐれているのである。

《内的属性》

内的属性に関する論議の詳細と、その要約説明は以下の通りである。

〈精神的属性：靈魂の認識能力〉

この属性は靈魂の認識能力に関わる属性、すなわち知という属性のことをいう。学識者のもつ知識のすべてが、アリーのもつ大海のごとき叡智のひとつであり、すべての知識がアリーにつながっているということに、見識者は誰1人として疑いをもたず、あらゆる学問の巨匠たちは、自分とアリーが知的につながっているということを誇りにしている。自説に固執するスンニー派の1人であるイマーム・ファフル・ラージーもこの点を認めている。

ところで、《注釈》の知識については、注釈者の第一人者がイブン・アッバースであることに疑念の余地はなく、彼はアリーの弟子であり、これは、スンニー派すべてが認めていることである。

《イブン・アッバースに尋ねた。「おまえの知識は従兄（アリー）の知識と比べていかなるものか。」アッバースが答えるに、「大海に対する水のしずくのようなものだ」。そして続けて言うことには「ある晩アリーは、一晚中ビスマッラー（神の名において）の〈ビ（において）〉についての解釈を私のためにして下さったが、終わることはなかった」と。》

また《クルアーンの暗誦》の知識が、アリーまで遡上されるということは明らかである。なぜならばクルアーンの暗誦家で最も偉大なのは、《アーシム》や《アブー・ウマル》であるが、彼らはアリーの弟子であったのである。

《アラビア語文法》の知識が、アリーまで遡るということは、説明するまでもなく明らかである。なぜならアリーは、アラビア語文法の諸規則を《アブー・アル＝アスワド・ドゥアリー》に教授し、彼にそれをまとめるように指示したからである。

《法源論、伝承学、伝承の解釈学、法解釈学、判例学》の知識について述べるならば、ムスリムの法学が、5つの派にもとづいていることは明らかで

ある。

(1) ジャアファリー派。この派がアリーまで遡ることは明白である。

(2) ハナフィー派。この派の創設者は、アブー・ハニーファであり、彼はイマーム・サーデクの弟子であった。イマーム・サーデクの学識が、アリーにまでつながっていることは明らかである。

(3) マーレキー派。この派の創設者はアブー・アブドゥッラー・マーレクであり、彼は《ラビーアトッ・ラアイ》の弟子であり、彼は《イクレマ》の弟子であり、《イクレマ》は《イブン・アッバース》の弟子であり、《イブン・アッバース》はアリーの弟子であった。

(4) シャーフィー派。この派の創設者はムハンマド・イブン・イドリース・シャーフィーであるが、シャーフィーは、マーレクの弟子であった。マーレクがアリーにまでつながることは明らかとなっている。

(5) ハンバリー派。この派の創設者はアフマド・イブン・ハンバルであるが、彼はシャーフィーの弟子であった。シャーフィーがアリーにまでつながることは明らかとなっている。

したがって、すべての法学者と伝承学者が、アリーにまでつながるということは明らかとなった。これが示唆することは、アリーが法の諸学において最も優れているということである。専門家も一般の人々も言い伝える伝承に、次の伝承がある。

《預言者がおっしゃったことには、「アリーは法判断することにおいて、あなたがたの誰よりも優れている」。》

法学において最高の知識をもつ人が、法源論に関する知識においても最高であらねばならないということには疑いの余地がない。このことを確実にしているのが、以下の伝承であり、これはシーア派、スンニー派の両派から伝えられている。

《アリーがおっしゃったことには、「もし私が権能者になったとすれば、ユダヤ教徒の間ではトーラーによって、キリスト教徒の間では彼らの福音書

によって、詩篇の民の間では詩篇によって、そしてムスリムの間ではクルアーンによって判断を下すでしょう。

神にかけて誓います！ 広野においての聖句であれ、砂漠においての聖句であれ、谷間においての聖句であれ、山間においての聖句であれ、地上においての聖句であれ、空中においての聖句であれ、夜間の聖句であれ、昼間の聖句であれ、私が誰について下され、何のために下されたかを知らない聖句は1つとしてない」。》

《神学》の知識については、神学者たちが自著のなかで述べていることが、アリーの言葉もしくは、アリーの清らかな子孫の言葉に源を発しているということは明白であり、少しなりとも研究した者にとっては、このことは明らかである。

さらに、ムアタジラ神学の学者たちもまた、その学祖である《ハサン・バスリー》と《ワーシル・イブン・アター》に依存している。ハサン・バスリーは、アリーの弟子であって、ワーシル・イブン・アターはアブー・アリー・ジュッバーイーの弟子であり、その人物はアブー・ハーシムの弟子でありアブー・ハーシムはアブドゥッラー・イブン・ムハンマド・イブン・アル＝ハナフィーアの弟子であった。彼は自分の父親の弟子であり、その父親自身がアリーの弟子であった。

アシュアリー神学派については、アシュアリー派の学祖は、《シャイフ・アブー・アル＝ハサン・アシュアリー》であり、彼は、アブー・アリー・ジュッバーイーの弟子である。よってアシュアリー派の学祖が、アリーにまでつながっていることは明らかとなった。

ハワーリジュ派については、その学祖は皆、結果としてはアリーに離反したが、アリーの弟子であった。

12イマーム・シーア派、ザイド派、およびその他のシーア派が、アリーにまでつながっていることは明らかである。

《神秘学》の知識について、スーフィーのすべて、また神智学の権威者た

ちすべてが、アリーとのこのようにつながっていることを誇りにしている。そればかりか、神秘学の巨匠である《シブリー》、《バーヤジード・バスターミー》、《マアールフ・カルヒー》、《ジュナイド・バグダーディー》等の言葉からも明らかなように、自らのマントをアリーから受け継いだとすることを最大の誇りとしている。彼らのなかでも優れた何人かは、アリーの清らかなる子孫に仕えていた。たとえば、《バーヤジード・バスターミー》がイマーム・サーデクの水番であり、《マアールフ・カルヒー》がイマーム・レザーの門番であったように。

しかし、『マワーキフ』の注釈者はある章において次のように言っている。

「《マアールフ》がイマーム・レザーの門番であったということは正しいが、《バーヤジード》がイマーム・レザーの水番であったということは、確実に明らかとはいえない。」

《哲学および真理の学》の知識については、知の知識におけるアリーのレベルは、古今の哲学者のうちの1人だけが、アリーのマントを肩にかけることが許されるということ以上に高位なものである。というのは、叡智とは、人間の能力に応じて事物の本質を知ることによっているからである。最も優れた叡智とは、神を知ることである。その知識には《世界の起源と来世》の知、《運命と宿命》、《預言者性》の秘密などが含まれている。以上に述べた知識や、アリーの言葉や説教においてみられるその他の知識の10分の1の知識すら、最も優れた学者たちの弁神論には見当たらないし、神智学や哲学の柱となる著作のいずれにおいても、それは全くといってよいほどふれられていない。

《哲学》は、理解力の成就における人間の能力の究極、あるいはその極限を探究するが、その究極とは人間に対して生じるところの《現実態の理性》の段階に達することである。《現実態の理性》というのは、そのような理性を有している者が、あたかも現実態の事物の真理を観照し、その1つとして意識から消えることがないといった方法で、そのような真理に関する知識を

把握していることを指すのである。アリーが現実態の理性の持主であることは、次の2つの理由から証明されている。

理由(1)——預言者がアリーについて、次のようにおっしゃった。「おまえは私が聞くことと同じことを聞き、私が見ることと同じものを見ている。ただし、おまえは預言者ではないのだが。」

預言者が観照という方法によって、すべての事物に関する知識をもっていたことには疑いの余地はない。したがって、アリーもまたこの方法によって知識をもっていたのである。

理由(2)——アリーは、次のようにおっしゃった。「たとえ戸張りが外されたところで、私の確信には変わりはない。」

すなわち、アリーが述べていることは、事物をあるがままに観照するという方法によって、それらの事物を認識しているということである。より神に近き人々（モカッラブ）の誰一人として、また偉大な一神論者の誰一人として、その段階にまで達したことはなく、また到達したふりすらしていない。

《軍事学》については、軍事に精通した者は皆、自らの戦いの様式をアリーの方法にならい、またアリーが誰よりもよく知っていたと言っている。このことは軍事の研究家すべてにとって、明らかである。

《政治学》および統治、行政、指導については、彼の指導と行政が最も正当なものであったことには疑いがない。アリーに敵対する人々が言っていたことには、アリーは統治と政治においては、包括的な知識に欠けていたというが、これは他方では、アリーはシャリーアに反することはなかったということを意味する。敵の間において、よく統率のとれた正しい統治、指導、行政を行なうには、シャリーアに反したことも行なうことがある。この点については、アリーがナフジュル・バラカのなかで指摘なさっている。

したがって、一連のすべての完璧さや、理解の学、伝承の学のすべてが、アリーに収斂するということが証明された。

イブン・アブー・アル＝ハディードは以下のように述べている。「美德の

分け前にあずかっている人は、アリーから受けているのである。統治の座を得た人は、彼から得たのである。知識の御旗をきわだたせている人は、アリーの説明によってきわだっているのである。世界の起源と来世を知った人は、アリーの言葉から理解したのである。神智学の燈をともした人は、アリーの知の松明から燈をともしたのである。あらゆる美德と完璧さの源は、アリーにあった。そして、アリーは、学術の場において、すべてを凌いでいる。」

このことについては、スソニー派の碩学の1人である《アブー・アル＝ムワッイド・ハワーリズミー》の伝承と、《サルマーン・ファールシー》の『マナーキブ』において、次のように伝えられている。

《預言者がおっしゃったことには、「あなたたちのなかで、私に次いで最も学識のあるものは、アリー・イブソ・アブー・ターリブである」と。》

また同著、および《ハーフェズ・アブー・ナイーム》が『ヒルヤト・アウリヤー』のなかで預言者から伝えられていることとして、預言者いわく、「叡智の総体は、10の部分から成っている。その9つの部分をアリーがもっていて、残りの1つの部分が、すべての人々との間に割当てられている」。

これが真なる党派の指導者の卓越性のランクであり、これこそが救済される党派の指導者の知識のレベルなのである。

ところで、過ちに満ちた3人のハリーファたちの知識のレベルというのは、以下のようなものであった。《アブー・バクルが言ったことには、「私を捨ておきなさい！ 私を捨ておきなさい！ 私はあなたがたより優れているわけではないのだから。あなたがたのなかにはアリーがいるのだから」と。》

第2番目のハリーファ（ウマル）は、数限りないほどの多くの場面において、法判断について過ちを犯し、アリーが彼を指導したのであった。《ウマルが言ったことには「もしアリーがいなかったら、ウマルは没落していたであろう」と。》

スソニー派は、自著のなかで様々な方法によって、この2つの伝承に言及している。

〈精神的属性：靈魂の実践力〉

靈魂の実践力に関わる属性というのは、いくつかの部分から成る。それらのすべてにおいてアリーは傑出しており、模範的存在であり、世界の人々の中心であった。

その第1は、《勇氣》である。国々を滅ぼすほどの、また戦いに巧みなアリーの勇敢さと勇氣は、あまりに明白であるので説明の必要のないほどである。専門家や一般の人々の伝える有名な話のなかに出てくるアリーの戦いぶりや、学者たちの著作の中に伝えられる彼の一撃。彼の勇敢さは言い伝えられ、彼の不屈の闘志の軌跡は繰り返し語られる。彼の戦いぶりは世界中に知れわたり、彼の上腕からの攻撃は人々の間において、たとえ話となった。アリーの攻撃のなかでも《ウマル・イブン・アブドゥド》を討った一撃については、預言者が次のようにおっしゃっている。

「ハンダクの戦いの時のアリーの一撃は、ジンや人間の勤行よりも優っている。」

当時、誠実なジブリールは、天と地の間ですべての人々に聞こえるほどに声をあげて叫んだ。「アリーの剣にかなり剣なく、アリーに優る若者はなし。」いかなる戦いにおいても、アリーは決して憶することなく、いかなる勇者もアリーの一撃から助かることはなく、アリーの剣の一撃は、さらなる剣の攻撃を必要としなかった。アリーについて、次のように述べられている。「アリーが剣を振りかざすときは必ず、馬とその乗者は、縦に2つに裂かれ、アリーが剣を振りおろすときは、馬とその乗者は、横に真二つに割られる。」

アリーの参戦したあらゆる戦いにおいて、征服と勝利がアリーのものとなった。そのときのアリーの年齢は、18歳を越えていなかったというのに。《ウマル》はアリーについて次のように言った。

「もしアリーの剣の一撃がなかったならば、イスラームの基礎は築かれなかったであろう。」

アリーに殺された者は皆、戦死者のなかでも誇りのしるしとなり、その親

類縁者は、この者はアリーに殺されたと自慢した。たとえば《ウマル・イブン・アブドゥード》の姉は、彼が殺された後、喪中においていくつかの詩を誦んだ。そのなかのいくつかの内容は、次の通りである。

「もし《ウマル》がアリー以外の人に殺されていたのならば、私は生きている限り泣いていたであろう。しかし、ウマルを殺した人物というのは、預言者を義父にもち、本人自身も戦いの勇者である。勇敢さにおいては秀逸であり、美德にかけては他に類をみない。よって私は、辱めを受けることもなく、殺されたウマルも名誉を穢されていない。」

そして一瞬たりともアリーのもとで過ごしたことのある勇者たちは皆、その後、命の続く限り、勇者たちの間でアリーの勇敢さを讃えた。

霊魂の実践力に関わる精神的属性の第2としては《寛大さ》がある。アリーが寛大な人々のなかでも、とりわけ寛大であり、また最も寛容であることには、誰も疑問をもたない。物乞いをする者を決して自分から遠ざけることなく、手にいれたものはすべて分け与えた。家族とともに昼間、断食を行ない、夜も空腹のままでいた。というのは、彼の手に入った食物は、乞食や気の毒な人々に与えていたのである。このような理由により、スンニー派のすべての人々も認めているように、アリーとその聖家族に関して、クルアーンの聖句がいくつも下されている。またアリーは賃労に従事し、その報酬を信仰のために費やした。たとえば1,000人の奴隷を自ら得た報酬によって自由にしたことさえある。

シャイフ・ムヒーユッ・ディーン・アラビー（イブン・アラビー）は、『フトゥーハート』のなかで、以下のように伝えている。「アリーが礼拝の最中に（物乞いに）与えた指輪の価値は、シリアの税収に等しいものであり、その税収が600ハルヴァールの銀と4ハルヴァールの金に相当するという（伝承は）正しい。」

ムアーウィーアは激しい憎悪をこめて、とりわけアリーの寛大さについて、次のように述べている。

「財産でいっぱいの家を、何物も残らないまで分け与え、その家財のあった場所を掃除してそこで礼拝をするというのが、アリーなのである。アリーにとっては、金でいっぱいの家も、ワラで一杯の家も同等である。そして、金の家をワラの家よりも先に、何もかもなくなるまで、分け与えるのである。」

靈魂の實踐力に関わる精神的属性の第3は《雄弁さ》である。アリーが世界中の雄弁家のなかでも最も雄弁であり修辞に優れていたことは、立証の必要性がないほど明白のことである。雄弁家たちは皆、アリーの言葉が被造物一般の言葉以上のものであり、創造主の言葉のもとにあることに意見の一致をみている。少しでも雄弁の資質を兼ね備えた者であれば、アリーの説論を編集した『ナフジュール・バラーク』について考えてみるならば、アリーの雄弁さは明らかとなる。アリーが雄弁家であることは、スニー派の人々の間でも、確実なものとされている。

靈魂の實踐力に関わる精神的属性の第4は、《性質の温厚さ》である。アリーは、類まれな勇敢さと攻撃力を備えているにもかかわらず、完璧なまでに人がよく、穏やかな顔つきをしていた。アリーの人のよさは、人々の間で格言になるほどであり、敵の間では、短所として特性づけられるほどであった。そして人々は、アリーがよい性格をしていると言った。

《ムアーウィーアはサウサア・イブン・サウハーンに、アリーの性質を自分に説明するようにと命じた。彼は答えていわく、「あの偉大なお方は、私たちとともにいらっしゃるときは、まるで私たちの一員であるかのような振舞をなさいました。私たちとともに座り、私たちとともに食事をし、私たちとともに語らい、私たちの話すことに耳を傾けられました。どこでも私たちが彼に呼びかけると、それに応じて下さいました。あくまで謙虚で腰が低く、また、たいへん忍耐強く、自己を犠牲にしながら、私たちとともに歩んで下さいました。しかし、これらの温厚な性質にもかかわらず、私たちはアリーを恐れました。それはまるで、手足を縛られた捕虜が、拔身の剣を手にして自分の首をはねようとする者を恐れるかのようでした。》

靈魂の實踐力に関わる精神的属性の第5は、《謙虚さと腰の低さ》である。アリーの謙虚さは、誰も疑いをもたないほどによく知れ渡ったことである。というのは、アリーは、非常な謙虚さと慈悲深さと腰の低さときめ細やかな情愛をもって、人々とともに歩んできたからである。つねに、貧乏な人々や慎ましい人々と親しくつき合い、彼らと座を共にし、次のようにおっしゃっていた。

「私は慎ましい人間であり、慎ましい人々と座をとにもする」と。

靈魂の實踐力に関わる精神的属性の第6は《温情と罪を許容する精神》である。このことは、アリーの敵に対する振舞いから明らかである。たとえば、イブン・ムルジムに対するアリーの処遇が、この点を明確に示している。サアド・イブン・アル＝アースとマルワーン・イブン・アル＝ハカムとアブドゥッラー・イブン・ズバイルに対し、アリーはらくだの戦いにおいて勝利をおさめたが、彼らのうちの1人として罰することなく捕虜とし、すべての者を自由の身とした。アブドゥッラー・ズバイルは、復讐しようとしたり、アリーを低俗な言葉で馬鹿にし、ののしったというにもかかわらず、そのように遇したのである。歴史書や言行録に記されているように、アリーは、他の敵に対しても同様の扱いをしたのであった。

靈魂の實踐力に関わる精神的属性の第7は、《禁欲》である。アリーの禁欲ぶりとアリーが現世的な享楽から自らを遠ざけていたことは、一般に、あらゆる党派において伝えられており、この点については、スニー派の学者たちもすべて認めるところである。

ムッラー・アリー・クーシュチーは、『タジュリード』の注釈書のなかで、以下のように述べている。

《アリーが現世的な享楽から自らを遠ざけていたことは、言い伝えられるまでになっている。アリーは現世のあらゆる享楽を支配するまでの完全な力を有していたにもかかわらず、たびたび、俗世について次のように言っていた。

「ああ俗世よ！ 私から遠ざかれ！ おまえはかつて私を罠にかけまいとしたことがあるのか。おまえはいつも私を享楽で惑わし騙そうと望んでいるのか。否！ 否！ おまえが私を騙すなどということは、到底およびもつかないことだ。いまだかつて、おまえは、私を騙すことなどできなかったのだ。私にとっておまえはもはや必要ではないのだから。おまえは他の者を騙すがよい。おまえのところに後戻りしないように、私はおまえに3回絶縁を言い渡している。ああ俗世よ！ おまえの繁栄は短かい。そしておまえの値打は小さく、おまえの希望は僅かばかりなのだ。」

そのあとさらに次のようにおっしゃった。

「ああ、現世を旅するに必要なものはいかに少なく、その目的はいかに偉大で、その道のりは長いことか。ああ、現世とは、いかに平坦でないことよ。』

シーア派、スニー派の両派とも自らの著書のなかにおいて、アリーが次のようにおっしゃったと伝えている。

「あなたのいう現世などは、私にとっては、癩病患者の飼っている豚の骨より卑しむべきものである。」

アリーの禁欲ぶりというのは、食物で決して満腹にすることがないほどのものであり、アリーは次のようにおっしゃっている。

「ヒジャーズの空腹の人々を横目にして、どうして私が満腹になるまで食べられようか。そのようなことをして、いかにして、信者の首長と呼ばれるにふさわしいことがあろう。」

アリーはいつも麦パンのくずを召し上がり、パン入りスープを少しだけ召し上がった。スープを食べるとしても《塩》か《酢》を入れるに限り、それよりもよいとしても、そのパン入りスープに《青野菜》の入ったものであった。時々牛乳をお飲みになり、非常に稀に肉を召し上がった。そして次のようにおっしゃった。「自分の腹を動物の墓場にすることなかれ」と。

シーア派もスニー派も、次のように伝えている。「アリーは、乾いたパンくずを貯える貯蔵庫をもっており、つねにそこからパンを取り出していた。

その貯蔵庫には封印がされていたのであるが、それは、ハサンとフセインが善意から、パンに油を混ぜるということをさせないためであった。」

アリーの着ている服は、非常に大きく、古着ばかりで、継ぎはぎが非常に多かった。アリーは自分の服を、あるときには、なつめやしの袋で継ぎ、またあるときには、古皮で継ぎはぎをしていた。もし、袖が長すぎるときには、それを裂いて、そのまま縫わずにおいた。

ある日、説教台にアリーが登段した。彼は継ぎはぎの上にまた継ぎはぎのほどこしてある服を着ていた。そして次のようにおっしゃった。

《「誠に私は、継ぎ師に恥ずかしく思うほどに自分の服に継ぎはぎをしている。」

そこで継ぎ師が言った。「アリーよ。この服をお捨てなされ。誰一人としてそのような服を着ることに満足はしないでしょう。」アリーはおっしゃった。「アリーは、この世の快樂と、何のかかわりがあるうや。うつろい死に絶えゆく享樂と、永遠ではない幸福に、私がいかにして満足することができようか。」》

禁欲の最高の段階は、禁欲者が自分に対して現世的な興味のすべてを否定する境地に達する段階であるということは明らかとなっている。アリーは、そのような段階を昇っていて、現世と来世の束縛から自らを解き放つ段階に達していた。そればかりか、己自身からも姿を隠し、神以外は、アリーの視界に何もなかった。アリーが心のなかで、次のように神と対話したと伝えられている。

「神よ！ あなたに罰せらることを恐れるゆえに、あるいは誉められんがために、あなたを信奉するものではありません。むしろ、まさにあなたが、私の信仰すべきお方であると知ったがゆえに、あなたに服従し、あなたの下僕であるという旗印をたてたのです。」

このような神の認識は、可能な限りの段階の極致であり、いかなる賢者も1人としてこの境地には足を踏み入れておらず、このことについては言及し

ていない。

靈魂の實踐力に関わる精神的属性の第8は《忍耐》である。アリーの忍耐のレベルは、次に述べるような災厄、もめごとが自分にふりかかり、策謀がはりめぐらされようとも耐えぬいて、神への感謝の念を決して翻すことがないというほどのものであった。

アリーの家の戸に火がつけられた。彼の家の戸というのは、神の《啓示の下る所》であったのだが、それが燃えてしまった。その戸は、ファーティマの腹を直撃し、ファーティマは流産してしまった。そして、アリーの肩が鞭打たれ、次にはひもがアリーの首にかけられ、アリーは家から外へひっぱり出された。アリーは勇敢で強い意思をもつ人であったのだが、じっと我慢し、信仰を翻すようなことはしなかった。

靈魂の實踐力に関わる精神的属性の第9は《信仰への確信》である。アリーがいかに神の意思に自らを委ねていたかは、誰一人としてそれを表現することができないほど崇高なものであった。あらゆる束縛から解脱し、超越的な愛の大海に身を委ねた人が、神以外の何ものも信頼としないということは明らかである。

繰り返しアリーがおっしゃったことには、

「たとえすべてのアラブが、次から次へと私に敵意を抱こうとも、私はそのうちの誰一人として恐れることはない。」

〈身体的属性〉

身体に属する誉れ高き性質は、勤行、服従、聖戦等にかかわるものである。アリーは当時でも最も熱心な信者であり、彼の礼拝のほとんどは、たとえ話となっているほどである。つねに日中は断食を行ない、夜は礼拝に専心していた。アリーの輝く額は、礼拝でひれ伏していることによって、らくだのひずめのような、たこができていた。このことについては、スニー派のほとんどの学者が自著のなかで言い伝えている。《ライラト＝ル＝ハリール》に

ついては、次のように伝えられている。敵と味方が列をなして対面している間に礼拝用の敷布を広げ、アリーは礼拝に専心していた。矢が左からも右からも飛んできたにもかかわらず、アリーは完璧な敬意と謙遜を保って礼拝に集中していた。その夜150回にわたって、アリーがアッラーは偉大なりと唱えるのが聞かれた。アッラーは偉大なりと1回唱えるごとに、2ラクア礼拝をし、またそれにつき1人の不信者を殺した。

不信者や偽善者が否定しようにもできないほど、アリーは何度も礼拝を行っていた。そして、アリーは預言者に対して、自分の命を犠牲にするほどに服従し、敵が襲ってきたときには預言者の身代わりとなって寝床に入りたりした。神は天使たちを前にしてアリーを称賛した。そして、「また人々の中には、アッラーのお喜びを願って、自分を売った者がある。アッラーは、ご自分のしもべに優しくあられる」(クルアーン；2：207)という聖句を下された。このことは、スンニー派の学者も認めている。ところで、アリーがいかに神の道において戦ったかについては、あらためて述べるまでもない。イブン・アブー・アル＝ハディードも、「アリーが神の道において戦ったかを否定する余地は全くない」と言っている。

〈外的属性〉

称賛に値する外的属性というものは、いくつかの範疇に分けられるが、アリーはそれらのすべてを所有しており、あらゆる人々のなかにおいて筆頭であった。

外的属性(1)——高貴な血筋。預言者の血縁関係が近ければ近いほど、その人の血筋がより高貴であることに疑いの余地はない。アリーは誰よりも預言者と近い関係にあった。というのは、預言者の父方の伯父で、預言者の父と両親を同じくする伯父の息子がアリーである。アッバースは、預言者の父方の伯父ではあるが、預言者の父アブドゥッラーとアッバースは異母兄弟であった。しかし、アリーの父のアブー・ターリブとアブドゥッラーは、両親を同

じくする兄弟であった。預言者の近親者や伯父たちのなかで、アブー・ターリブほど預言者を援助し保護した人はいなかった。アブー・ターリブが存命中は、預言者はメッカからの遷都は行なわず、敵方からの脅威もそれほどではなかった。しかし、アブー・ターリブが逝去すると、遷都をせざるをえなくなったのである。預言者と同様に、アリーも両親双方ともハーシェミー家の血筋にあたる。アリーの父は、アブー・ターリブ・イブン・アブドゥ＝ムッターリブ・イブン・ハーシェムであり、母はファーティマ・ビント・アサド・イブン・ハーシェムである。

外的属性(2)——人間関係の高貴さ。アリーが誰よりも、最も預言者と近い関係にあったことは疑いの余地のないことである。というのは、ファーティマの夫である者は、預言者の他の娘婿よりも、もちろんのこと、預言者とより近い関係にあるからである。それは、ファーティマが女性の長であるという理由による。シーア派もスンニー派も預言者からの伝承として伝えているように、「ファーティマは、預言者のもとにあって、最も愛されていた神の被造物であった」。

外的属性(3)——アリーは、ハサンとフセインの父親であった。ハサンとフセインは、シーア派もスンニー派も見解が一致しているように、預言者に天国の若者たちという呼称で呼ばれていた。いずれの教友に、このようなすぐれた偉大な人物がいたであろうか。

外的属性(4)——アリーの慈愛深さというのは必然である。というのは、アリーは《神に最も近き聖人》であり、《神に最も近き聖人》の慈愛の深さというのは必然だからである。「言ってやるがいい。『わたしはそれに対して、何の報酬もあなたがたに求めてはいない。わたしはあなたがたの近親としての情愛だけを求める。』」（クルアーン；43：23）という聖句も指摘しているように。この聖句の明示的な意味としては、「ムハンマドよ、言ってやりなさい。私は啓示を下す代償として自分の近親者の愛情以外、何の報酬も求めたりしない」である。したがってアリーの抱く親愛の情は、あらゆる信仰

儀礼よりもすぐれ、最も神に接近している。この点については、シーア派、スニー派の両派から次のように伝えられている。「アリーのもつ愛情は、それがあゆえにいかなる不義も害悪もおよばされないといった美德なのである。」

アリーの慈愛に関する伝承や、それがいかなる服従よりもすぐれ、またいかなる勤行よりもまさっているという記述は、シーア派、スニー派の両派を通じて各々の著書のなかに際限なくみられる。特に、アリーが神と預言者のもとで最も慈愛を享受した人物であるということについての伝承は、シーア派、スニー派の両派の著書に多く伝えられている。

とりわけ《ターイル・マシュウィー》の伝承は、一般書および専門書のなかで数多く伝えられている。その伝承というのは、次のとおりである。

《ある日、串焼きの鶏が贈物として預言者に届けられた。預言者がおっしゃったことには、「ああ、神よ！ この鶏を食べるにあたって、あなたのもとで最も愛されている人を私の前へお連れ下さい」。そのときアリーが部屋に入っていた。そして、預言者と一緒に鶏を召し上がった。》

シーア派の人々にとって、アリーの特性が愛すべきものであるということ は明らかである。また、不信者や敵対者が、信仰や規律に関し、アリーに反目しているにもかかわらず、その一方でアリーに親愛の情をもっている。不信者であった諸王もアリーの顔を自分の礼拝堂に描き、《アトラーク》や《ブワイフ家》のスルタンもアリーの顔を自分の剣に描いていた。

以上が、アリーの属性の範疇とその解釈である。そして、アリーがあらゆる完璧な属性において、それが外的属性であれ、内的属性であれ、また知的属性であれ、実践的属性であれウソマのすべての人々よりも卓越し、長じているということは明白となった。したがって、他の人が、アリーに先んじるということはふさわしくなく、ましてやそのランクが最も卑しくそのレベルが何ものよりも価値のないような人々は、誰一人としてアリーに先んじることにふさわしくない。

3. クルアーンおよびハディースにもとづく証明

アリーのイマーマに関する根拠の記録は、クルアーンの聖句であれ、預言者の伝承であれ、シーア派およびスンニー派の書物のなかに共通してみられるか、あるいはどちらかの一方に書き残されている。それは限りのないほどであり、広く知れ渡り言い伝えられるまでになっている。

クルアーンやハディースの記録文書は、2つに分類される。1つは、明白な文書であり、内容の意図が明白であるものである。もう一方は、隠論的文書であり、一種の証明が必要であり、内容の意図が明白ではないものである。

ここでは、クルアーンの聖句および伝承から、明白ないし隠論的文書のなかからいくつかの文書をあげることで十分であろう。以下に述べる程度で、学究者を導くにあたっては十分であるので、数多くの文書について述べることは控えることとしよう。

〈明白な文書〉

文書(1)——アフマド・イブン・ハンバルが自著『ムスナド』のなかで伝えているハディースに以下のものがある。

《サルマーンが預言者に次のように申し述べた。「預言者よ！ あなたに次ぐ後継者は誰でありましょうか。」預言者は答えていわく、「サルマーンよ！ 私の兄弟であるムーサーの後継者は誰であったか。」

サルマーンはそれに答えて言った。

「彼の後継者は、ユーシャ・イブン・ヌーンです。」そこで預言者はおっしゃった。

「サルマーンよ！ 私の後継者であり、相続者であり、また宗教を司り、信仰を実践し、私の後継者として任命されるのは、アリー・イブン・アブータリブである。」》

文書(2)——イブン・ムガーズィリー・シャーフィーの『マナーキブ』、またイブン・シールワイフ・ダイラミーの『フィルドゥース』のなかに、以下

のように預言者がおっしゃったと述べられている。

「私とアリーは、アダムが創造される1万4,000年前、神のもとで1つの光であった。神はアダムを創造されたとき、その光をアダムの内奥におかれた。その光は、つねに預言者の内奥にあった。そしてアブドゥ＝ル＝ムッタリブの内奥において分岐していった。したがって、私においては《預言者性》としてあらわれ、アリーにおいては《代理者性》としてあらわれている。」

文書(3)——ウスム・サリマが預言者からのものとして伝え、またスニー派のなかでも自説に頑固なイブン・マルダウィフが『マナーキブ』のなかで伝えているハディースがある。しかし、その伝承は非常に長いので、伝承の最後の部分を示すと、次のように預言者がおっしゃったとある。

「至高なる神は、いずれの共同体からも1人の預言者を選んでいらっしゃる。そして、そのいずれの預言者に対しても後継者を選んでいらっしゃる。私はこの共同体の預言者であり、アリーは私の家族、そして共同体においても私の後継者である。」

文書(4)——シーア派、スニー派の両派が伝えているハディースであるが、預言者がアリーの手をとって、次のようにおっしゃった。

「この人が私のあと、あなたがたの間で私の代理となる人である。したがって、彼に従い、彼の言葉に耳を傾けよ。」

〔※文書(5)は、当翻訳に使用した校訂版(1363年S H／アル＝ザフラー社)において欠如している。〕

文書(6)——有名なハディースで、預言者がアリーに次のようにおっしゃった。

「アリーよ！ おまえは私の亡きあと、私の代理人である。」

文書(7)——有名なハディースで、預言者が次のようにおっしゃった。

「信者たちの長として、アリーにあいさつをせよ。」

この伝承は非常に有名であり、広く知れ渡っている。

文書(8)——スニー派の学識者の1人であるサアレビーや、その他の人々

が次のように伝えているハディースがある。

《預言者が、アブドゥ＝ル＝ムッタリブの子供たちを自分の家に召集し、彼らをもてなした。そして次のようにおっしゃった。「あなたたちのなかで、私のあとに地上において、私の代理人となることを受け入れる人は誰であろうか。」皆が沈黙した。そこでアリーが言った。「私です」と。預言者は同じ質問を3回行なったが、そのいずれにおいても、他の参集者は沈黙し、そのなかでアリーだけが「私です」と答えていた。そこで預言者がアリーに向かって次のようにおっしゃった。「おまえは、私の弟であり、私の親友であり、私の相続人であり、私の後継者であり、そして私の代理人である」と。》

文書(9)——預言者がウマルに次のようにおっしゃったというハディースがある。

「ウマルよ！ アリーがある道を行き、すべての人々が別の道を歩む場面に行き交ったとするならば、おまえはアリーの進む道を行きなさい。アリーはおまえを道に迷わせたり、真理と別の方向へ導いたりはしない。

ウマルよ！ アリーに従うことは、私に従うことである。そして私に従うことは、神に従うことである。」

文書(10)——ハワーリズミーが自著『マナーギブ』のなかで言及しているハディースで、預言者が次のようにおっしゃったとある。

「私の亡きあと、代理の任についてアリーに対立する者は、不信者であり、神および預言者に闘いを挑む者である」。

文書(11)——シーア派、スニー派の両派が、様々な経路で伝えているハディースで、預言者が次のようにおっしゃったとある。

「真理はアリーとともにあり、アリーは真理とともにある。天国の池において、私のもとにアリーが来るときでさえ、アリーと真理は互いに分かれたることはないであろう。」

文書(12)——ほとんどのスニー派の学識者が伝えているハディースで、預言者が次のように伝えたとある。「アリーは私のものであり、私はアリーの

ものである。そしてアリーは信者すべての指導者である。」

文書(13)——スソニー派の見識者であるハーフェズ・アブー・ナイームが、『ヒルヤト・アウリヤー』のなかで《アナス》から伝えられたハディースとして、次のように伝えている。

《ある日、預言者が私におっしゃった。「清めを行なうので、水を用意するように。」そこで私は水を用意した。預言者は清めを行ない、2ラクアの祈りを捧げておっしゃった。「この扉から最初に入ってきて、おまえの前に来た人が、敬虔な指導者であり、ムスリムの長であり、信心篤き信者の長である。」そこで私はその扉からアリーが入ってくるのを見た。》

文書(14)——有名なハディースで、次のように預言者がおっしゃったとある。

《「アリーは、信者の長であり、罪を犯した人々を懲らしめる。アリーを助ける人については誰でも神はその人を助けるであろう。そしてアリーを侮辱する者に対しては、神は軽蔑するであろう。」そして預言者は3回次のようにおっしゃった。「目覚めよ！ 真理はアリーとともにあるのだ。」》

明白な文書が、シーア派、スソニー派の両派の書物において明確に伝えられ、スソニー派のほとんどが、これまでに述べた文派を認めているが、他方では、根も葉もない話を反証として述べる者がいるということは、まぎれもないことである。全く驚いてしまうことには、スソニー派の人々が自らこれらの伝承を伝えておきながら、受け入れていないということである。

ファフル・ラージーが次のように言っている。「この伝承記録集は、心を打たない」と。そのとおりである。邪道に陥った心は、偏見と盲従を患ってしまったのである。偏見と盲従が、しっかりと奥底深くうえつけられ、よこしまな性格が彼に備わってしまったのである。よって、もはや何ものも彼に影響を与えないのである。

イブソ・アブー・アル＝ハディードは、アリーをいずれの教友よりも優先し選好しているのだが、アリーの指導者性に関する文書について述べたのちに、以下のように言っている。

「預言者のあとの代理は、アリーが継ぐべきものということに疑いの余地はない。しかし、アリーは非常に禁欲的で、現世的なことがらから離れて身を置いていたので、自ら俗世的なことがらから隔絶し、人々を俗世の誤謬と迷妄のなかへ置き去ることとなった。」

学識者がこのような偽言を発するとは、誠に驚きである。アリーの言葉のほとんどが、特にナフジュル・バラガの説論は、アリーが一生懸命代理の任を務めようとすることの証しであるにもかかわらず、アリーは無理矢理、代理の長の地位を剝奪されたのである。アリーは他の人がハリーファになることに満足していなかったし、このことについては、シーア派、スンニー派の両派においてはっきりしていることである。預言者の代理を務めることやウンマの指導を行なうことは、アリーが禁欲的であるがゆえにそれらから手を引くといったような世俗的なことがらではない。むしろ代理の任のほとんどの段階が来世とつながっているのである。全く、スンニー派は、これらの明白な文書記録を目にしながらか、うまく用いることができない。ゆえに、上述したような馬鹿げた話を反証としてあげるのである。

《隠論的な文書》

アリーが預言者の代理の任を拝命したことについて、演繹を要する隠論的な文書は、それらを限定しようにも夥しくあるので最も確固たる聖句とハディースのいくつかをあげることで十分であるとしよう。

〈クルアーンの聖句〉

その1——至高なる神が次のようにおっしゃった。

「誠にあなたがたの真の友は、アッラーとその使徒、ならびに信仰する者たちで礼拝の務めを守り、定め喜捨をなし、謙虚に額づく者たちである。」

(クルアーン；5：55)

専門家も一般の人々も皆、礼拝においてアリーが自分の指輪を喜捨した時

に、この聖句がアリーについて下されたものであることに意見の一致をみている。

まきれもなくスンニー派の人々は、この聖句がアリーについて下されたものであると認めている。またスンニー派は、この聖句の「信仰する者たちで……」から以下、最後までが、アリーを指していることも認めている。しかし、アラビア語において《ワリー》という語は、いくつかの意味をもっていると彼らは言う。その1つは、《宗教および現世的な事に関する専断権を有するにふさわしい者》という意味であり、それが意図するのは、イマームやハリーファである。また他方、《保護者》という意味もあれば、《愛する者》という意味もある。よって、上述の聖句における《ワリー》を《援助者》や《慈愛深き者》の意味にとって、いかなる不都合があろうか、とスンニー派は主張するのである。

これに対する答えは明瞭である。なぜならば、聖句の初めにある《innamā》という語は、アラビア語においては《限定》をあらわす。したがって《innamā》が《限定》を示しているならば、上述の聖句の意味は、「あなたがたのワリーは、神、預言者そしてアリーに限られる」ということになる。そしてウィラーヤをこの3人に限定することについては、《ワリー》の意味を《宗教および現世的な事に関する専断権を有するにふさわしい者》ととるときに正しくなるであろう。なぜならば、もし《ワリー》を、《援助者》や《慈愛深き者》という意味にとるならば、ウィラーヤが神、預言者、アリーに限られるということはない。信心深い者の誰か1人、あるいは天使のうちの1人が、援助者や慈愛深き者という意味によって他の信者のワリーとなることもありうるのである。というのは、あらゆる信者は、他の信者にとって、《援助者》でありまた《慈愛深き者》であるからであり、また同様に、天使もまた、信者にとっては《援助者》であり《慈愛深き者》であるからである。ましてや不信者がムスリムに親愛の情をよせ、信者を助けたりすることは、よくあることである。したがって、援助したり、親愛の情

をもって接するということは、神、預言者、アリーに限られたことではない。

その2——至高なる神は次のようにおっしゃった。

「アッラーを畏れ、言行の誠実な者と一緒にいなさい。」（クルアーン；
9：119）

この聖句の意味を解明すると、至高なる神は、人々に対して真正な心の持ち主に従うようにとおっしゃっている。真正な心の持ち主が誰をさすかについては、その人の誠実さが確実であり、その人の言葉に決して嘘がないということに疑いの余地はない。そのような人物とは、無謬性を備えた人をおいて他にない。よって、真正な心の持ち主とは、無謬性を備えた人をさす。衆目の一致するところでは、預言者のあとにアリー以外には誰も無謬性を備えた人はいなかった。さらに、真正なる心の持ち主は、預言者の清らかなる子供たちも指すことは、この聖句の解釈に示されている。

その3——至高なる神がおっしゃった。

「アッラーに従いなさい。また使徒とあなたがたのうちの権能をもつ者に従いなさい。」（クルアーン；4：59）

《権能をもつ者》が、《無謬》で《卓越》した人物を意図することに疑いの余地はない。なぜならば、その人が無謬でないのならば、神が人々を忌まわしい方向へ導くという必然が生じるであろう。無謬性をもたない人は、時には過ちを犯し、人々を醜惡なことがらへ招くこともあるからだ。またもし指導者が、卓越した人物でないと仮定すると、神は、より卓越した人物をそれより劣った者に屈服させ、博識者に対し無知蒙昧な服従を命じることとなる。これもまた醜惡なことである。したがって、《権能をもつ者》は、無謬かつ卓越していなければならず、預言者亡きあとには、疑いなく、アリー以外にそのような人物はいない。この内容の聖句は、非常に多くあるが、私たちが述べた程度で十分であろう。

〈預言者のハディース〉

ところで、預言者に関する伝承は、隠論的な文書である。シーア派、スンニー派の両派の著書には、際限なくその伝承が伝えられている。しかし、この論文の紙面には限りがあるので、ここでは両派にとって、確実とされているいくつかの伝承を述べることにしよう。

ハディース(1)——シーア派、スンニー派の両派の間で伝えられている《立場》のハディース。そのハディースが伝えるところでは、預言者が以下のようにおっしゃった。

「アリーよ。おまえと私の関係は、ハールーンがムーサーとの間柄における立場に等しい。ただし、私のあとに預言者というものは続かないのだが。」

私のあとに預言者がいないといっているのは、ハールーンは預言者でもあったのだが、アリーは預言者ではないことを言っている。

このハディースからは、ハールーンがムーサーとの間柄におけるあらゆる立場を、預言者がアリーに対して自分との関係において証明したことが演繹される。ハールーンがムーサーの側近であり代理であり、後継者でありまた兄弟であったことに疑いの余地はない。そして、ムーサーがシナイ山に行き、人々のもとからいなくなるときにはいつでも、ハールーンはムーサーの代理人であり、また預言者でもあった。したがって、預言者という立場を除くそれらすべての立場がアリーにもあてはまってしかるべきなので、預言者自ら、預言者性がアリーにあてはまらないことを例外的におっしゃったのである。

スンニー派は、このハディースにおいて代理者性を含むあらゆる立場を含んでいる立場が、一般概念ではなく、むしろ、兄弟性というある特定の立場だけが主張されている可能性があるなどとは言うことはできない。なぜならば、アラビア語の文法に準ずると、ここにおける《立場》は以下の2つの理由から一般概念となる。

まず、その1つとしては、《立場》という語は、ムーサーの所有格によって結ばれており、その所有の目的語である普通名詞は、一般性を示している

からである。

また2番目の理由としては、預言者が預言者性というものを、自らの立場において例外としていることであり、《立場》という名詞が一般概念をあらわしていないとすると、預言者性をその例外とすることは無意味である。アラビア語の大家たちがこのことに一致しているうえに、教養のある人ならば誰でも、次のことを理解している。ある人が他者に、「おまえと私の間柄は、ある性質を除いては、ザイトのウマルに対する関係のようなものだ」と言うならば、その話者が言わんとすることは、例外として特に挙げたその性質を除いては、ザイドがウマルに対して有しているであろう諸関係を対話者が有しているということである。また、このハディースは、スニー派の一員がそれを否定できるような方法によっては、スニー派から伝えられていない。

したがって、上述のハディースが、スニー派の経路によって伝えられていることが明らかとなった。というのは、シーア派の経路がスニー派の経路と結びついている場合があるからである。

ハディース(2)——《ガディール・ホーム》の伝承である。これは、シーア派、スニー派を通じて一般に次々に伝承されるまでになり、またそればかりではなく、預言者ムハンマドの時代のウマ全体においても次々に伝承されていった。この伝承については、ガディール・ホームに預言者がいた日に、預言者のもとにいた8万6,000人が証人であると伝えられている。偉大な学者であるイブン・ウクダは、この伝承を105の経路から伝えているが、150の経路から伝えたものもあれば、125の経路から伝えたものもいる。タバリーは、85の経路から伝えている。イブン・ムガーズリー・シャーフィーは、『マナーキブ』のなかで12の経路から伝え、そのあとで述べていることには、このハディースのなかにいかなるまちがひも欠点も見出すことはできず、この伝承は、アリーを抜擢したということを示している。

このハディースは、ほとんどスニー派の著書のなかで述べられており、それには例えば、サヒーフ・ブハーリー伝承集、サヒーフ・ムスリム伝承集、

サヒーフ・ティルミジー伝承集、サヒーフ・アブー・ダーウド伝承集、正しき人々による伝承集、60人の正しき人々による伝承集、アフマド・ハンバルの伝承集、サアレビーの注釈集、イブン・アブド・ラッブフのイクド、イブン・マルタウィフの著作等々のスンニー派の著書がある。それらの著書の多くにおいて、様々な経路からガディール・ホムの伝承が伝えられている。

いずれにおいても、ガディール・ホムのハディースは次のとおりである。《預言者が最後の巡礼から戻ってきたときに、3日にわたってジブリールが次々にお告げをもって降天してきて、神からのアリーを後継者に任命するようというお告げを伝えた。預言者は、これを公表するのを延期した。そして特に、この件に関して神の命令が断固たるものとなり、敵の悪業からアリーを守れという知らせが届くまで、預言者は待つこととした。というのは、多くの教友が非常な憎悪と敵意をアリー・イブン・アブー・ターリブに対して抱いており、アリーを代理人にしようものなら、反乱を企てるであろうことを預言者は知っていたからである。そこで預言者がガディール・ホムへ着いたときに、ジブリールが降天し、以下の聖句を伝えた。

「使徒よ！ 主からあなたに下されたすべてのものを宜べ伝えなさい。あなたがそれをしないなら、主の啓示を宜べ伝える使命は果せないであろう。アッラーは、危害をなす人々からあなたを守護なされる。アッラーは、決して不信心の民を導かない。」（クルアーン；5：65）

ジブリールがこの聖句をもってきたのは、正午であった。その日は、灼熱の太陽で非常に暑い日であった。ある者は、上着を脱いで足もとにやり、またある者は頭上にかかげて日よけとした。そのような時に、預言者は自分のために、らくだの鞍で説教台をつくるように命じた。預言者はその説教台に登り、神に感謝を述べたあと、次のようにおっしゃった。

《「ムスリムたちよ。私は、あなたがたにとって、あなたがたの魂よりもふさわしくないのか。」皆が申し上げた。「はい。その通りです、預言者よ！」そこで預言者はアリーの手をとって次のようにおっしゃった。「私を自らの

主人とみなしている人のすべてにとって、アリーもまたその人にとっての主人である。神よ！アリーを愛する者を皆、愛し給え。そして、アリーを敵とする者を皆、敵とみなし給え。アリーを助ける者は、誰でも助け給え。そして、アリーを見捨てる者は皆、見捨て給え。」そこでジブリールが降天し、聖句を告げた。「今日、われはあなたがたのために、あなたがたの宗教を完成し、またあなたがたのための教えとして、イスラームを選んだのである。」

(クルアーン；5：3) そこで、ウマル・イブン・アル＝ハッターブがアリーにむかって言った。「なんとすばらしいことよ。アリー・イブン・アブー・ターリブよ！あなたは、まさに私にとっての主人となり、すべての信者の主人になったのである。』」

この伝承について、上述のクルアーンの聖句にもとづいて論証を行なうと、《主人：maulā》という語が、ここでは「宗教的な事がらおよび現世的な事がらに関する専断権を有するにふさわしい者」という意味であり、それは、イマームおよびハリーファを指していることとなる。たとえ、アラビア語におけるその語についての他の意味、たとえば「援助者」、「慈愛者」、「解放者」、「被解放者」、「隣人」といった意味をこの場合にあてはめようとも、ここでは必然的に「宗教的な事がらおよび現世的な事がらに関する専断権を有するにふさわしい者 (aulā)」という意味となる。これは、次に述べる理由に依拠している。

理由(1)——預言者が、私はあなたがたにとって、あなたがたの魂よりもふさわしくないか、とおっしゃったのであるが、これにひきつづいてmaulāという語とおっしゃった。maulāという語もまたaulāという語から派生しているのであるから、同じ意味でなければならない。

理由(2)——ガディール・ホムの伝承の当日のように灼熱の時に、信者は互いに友人であり助け合う者同士であるのに、わざわざ、アリーはあなたがたの友人であり、援助者である、と言うために、預言者が荒野に人々を召集したなどとは、知性のある人ならば誰も思わないであろう。このような状況の

もとでmaulāの意味が、友人とか援助者という意味として成立するとは、知性のない者でさえ決して主張することはないであろう。

理由(3)——聖句に示されているところの、宗教を完成し、神の恩恵を全うすることとは、アリーが信者の長となることを包含しており、それ以外の意味は、全く適当ではない。

理由(4)——預言者がアリーを代理人としたことについて、ウマルがアリーを祝福したことは明白である。先述したハディースにおいて、《maulā》という語が、「宗教的な事からおよび現世的な事に関する専断権を有する者」という以外の意味を付すことができないことはすでに述べた。しかし、ここではこのハディース自体を否定することができないので、《ワリー》という語を、《保護者》あるいは《慈愛者》という意味でとらえることに、いかなる問題があろうかと主張する一部のスニー派の墮落した発言が明らかとなる。預言者が、そのような災天下の日中に8万6,000人の人々をとどまらせ、説教台を作らせ、その台上にあがって「私の友人は皆、アリーの友人である」とおっしゃったというように、このハディースの意味をとらえようとする知性のない者たちには、全く驚くばかりである。この点に関しては特に、神も2つの聖句を下されている。

このことを理解することは、何とすばらしいことよ！よくぞ、このことを認識したものだ。「彼らは谷間をさまよっていることを知らないのか。彼らは好き勝手なことを言っている。アッラーよ、このさまよえる民に災いあらんことを。」（※クルアーン；26：225～226および9：30を合成したものとなっている。）

ハディース(3)——スニー派がその書物を通じて伝えているハディースで、預言者が、次のようにおっしゃったとある。

「私が亡きあとに、アリーが私の座につくことに反対し圧力をかける者は、私および他の預言者たちの預言者性を否定しているようなものである。」

そして、《座につく》という意味が、《代理》の意を指すことは、誰にとっ

ても明らかなことである。

4. 奇跡にもとづく証明

ところで、奇跡をおこし、聖跡を顕現させ、超常現象をおこし、予知能力があるということにより、その人にイマームが委ねられていることが証明される。シーア派、スンニー派の両派の書物に書きとめられ、専門家、一般人を問わずよく知られているように、アリーが際限なく奇跡をおこし、無数の聖跡をあらわしたことは、まぎれもないことである。たとえば、3回にわたって太陽を隠したこと。1回めは預言者の存命中であり、2回めは、預言者の亡くなったあとのことである。スンニー派は、アリーが太陽を隠したことに對して異議を唱えはしないが、回数については、3回おこしたことを受け入れない場合がある。しかしこのことは、われわれシーア派にとって特に問題とはならない。というのは、回数が3回でなかったとしても、アリーが太陽を隠したということを証明することで十分であるからなのである。他の例としては、クーファのモスクの説教台のうえで大蛇と会話したこと。また、ジョンと闘ったこと。さらには、70人の人がもちあげようとしてもできなかったハイバルの扉をもち上げたことなどである。これらのことは、スンニー派も認めている。

アリーがおこした奇跡は他にも多くあり、そのなかには、スンニー派が認めるものもあれば、否定するものもある。しかし、われわれシーア派の主張のためには、上述のことで十分である。

アリーの予知能力については、たとえば、ラマダーン月に自分が殉教死することを予見したことや、《マイサム・タッマール》、《ラシード・ハジャリー》、《カミール・イブン・ジャード》等といったアリーの友人に対して、《アブー・スフィヤーン家》の暴挙がもたらされるであろうと予告したことが例としてあげられる。さらに、ハワーリジュ派の刺客であった《ズィーユッ・スディアー》が殺害されることを、アリーが予告したことがあげられる。こ

れら以外にも将来についての予見をおこなったが、そのことについては、シーア派もスンニー派も認めている。

アリーが死を予告することに関しては、スンニー派に固執する人々でさえ、次のようなことを書物のなかで伝えている。

《ある日人々が、アリーに次のように上申した。「ハーリド・イブン・ガウィータが《ワーディユ＝ル＝クラ》にて死去いたしました。」アリーはおっしゃった。「それは嘘である。その者の軍勢が、私の息子フセインを刺すまでは、死ぬことはないであろう。そして《ハビーブ・イブン・アッマール》が、その者の旗手をつとめるであろう。その時、バビーブ・イブン・アッマールは、アリーの説教台の足許にいた。そして立ち上がって次のように申し述べた。「私は、あなたを敬愛する者の1人であります。」そこで、アリーは、「敵の旗手となることはやめよ。しかし、私はおまえが将来、敵の旗手となり、あの扉から入ってくることを確信している。」とおっしゃった。そして、アリーは象の扉を指さされた。》

ところで、《イブン・ジャード》が《ウマル・サアド》を、フセインへむけて出兵させるとき、ウマル・サアドは兵士の一団を先に派遣した。そして、その先兵隊の隊長をハーリド・イブン・ガウィータとし、その旗手をハビーブ・イブン・アッマールがつとめたのであった。

5. アリー以外のハリーファたちが不適格であるということよりの証明

他の3人のハリーファが、ウンマを指導する任に不適格であるという角度より、アリーにイマームが委ねられていると証明するというのは、その3人のハリーファから発せられる指示のいくつかは、イマームやヒラーファのレベルに反していようと、なおもウンマの人々が彼らから離れようとしないということに依拠している。ウンマの人々は、預言者の代理の問題について2つの派に分かれるのである。1つは、アリーをハリーファとみなす人々であり、もう一方は、他の3人のハリーファを認める人々である。代理の任は

アリーに委ねられてしかるべきである。というのは、他の3人に対して代理として適性に欠けていることが証明されるならば、アリーをおいて他にはイマーマを自らの任として主張する者はいないからである。

ところで、3人のハリーファが発した指令で、預言者の代理のレベルに反するものは、数限りなくある。シーア派、スンニー派の両派の書物には、彼らを鋭く批判したものでいっぱいである。私たちは、両派ともが認めているいくつかの例をあげることで満足としよう。

たとえば、信仰のない部族や預言者のウソマの罪深き者たちは、預言者の家に火をつけた。そして、アリーとファーティマに対して、できうるかぎりの悪事を行なった。それは自分たち自身が、預言者が次のようにおっしゃったと伝えているにもかかわらずである。

「アリーとファーティマを困難に陥れる者は、私を困難に陥れているのである。そして、私を困難に陥れる者は皆、神を困難に陥れているのである。」

さらに彼ら自身が、次のように伝えている。

「アリーを困難に陥れる者は誰でも、ユダヤ教徒とキリスト教徒と結託している。」このような人々が、預言者の代理になおもふさわしいというのであろうか。

また、アブー・バクルは、ファーティマが、彼女の父親である預言者の遺産を相続することを禁じた。それは、アブー・バクル自身が捏造したハディースを根拠としていた。そのハディースとは、預言者が、「私たち預言者というのは、遺産の授与者とはならない。私たちの遺産は、喜捨されねばならない。」とおっしゃったというのであるが、これは、クルアーンの聖句の多くに反している。

このようなことを預言者がおっしゃったとは、理性が受け入れないし、アリーも聞いていない。また教友の誰一人として聞いていないで、アブー・バクルだけがそのハディースを聞くというようなことは、理性が認めるところではない。しかし、ファーティマに下した判断は、アブー・バクル自身が下

した裁決にも反しているのである。というのは、アリーとアッバースが預言者の《騾馬》、《剣》、《マント》について、アブー・バクルに判断を仰いだ時には、アブー・バクルは、これらの品は、アリーが相続するものであると判断を下しているのである。

また、アブー・バクルとウマルは、ファーティマが《ファダクの町》を継承することを禁じた。預言者はすでに、ファーティマにファダクを与えていたにもかかわらず、それを禁じたのである。ファーティマは、アリーとハサンとフセイン、そして《ウソム・イーマン》を殉教の道へ導いた。しかし、ウマルは、彼らが殉教したことを否定し、次のように言うのである。「アリーと、ハサンとフセインの殉教は、受け入れることができない。というのは、彼らは虚偽・欺きに加担しようとしたからである。また、ウソム・イーマンは、女性であり、女性が殉教するということも受け入れられないことである。」

アリーとハサンとフセインは、無謬性を備えており、自らの偉大さを自覚していたし、他方、ファーティマについては、預言者は、彼女が天国に行く人であることを予告していた。預言者の導く法においては、夫と子供と女性が殉教することは受け入れられている。しかし、これにもかかわらず、ウマルは、受け入れようとしなかった。また、アブー・バクルは、自らのあやまちを認識したあとで、《ファダク》をファーティマに返した。そして、それを書面に残し彼女に渡した。しかし、ウマルはその書面をファーティマからとりあげ、破棄し、ファダクを自分の所有とした。これがファーティマにとって、このうえない虐待であったことは疑いない。そして、この理由からファーティマは、アブー・バクルやウマルが、ファーティマの死に際し、祈りを捧げることをないようにと遺言を残したのである。《ウマル・アブドゥ＝ル＝アジーズ》は、この虐待を理解し、ファダクをファーティマの子供たちに返したのである。

また、3人のハリーファたちは、《ウサーマ》の軍に意図的に参加しなかった。他方、預言者は、ウサーマの軍に意図的に参加しない者を呪った。よっ

て預言者が呪う対象となるような人物は、ハリーファとして適格ではない。

また、アブー・バクルはこの世を去るときに、果して自分がハリーファに適していたかどうか疑問にもった。そして次のように言った。

「ああ、預言者にハリーファは誰によって遂行されるべきか尋ねておけばよかった。（預言者が任命した）その人に、私は敵対しなかったであろうに。」

さらに、アブー・バクルは、次のように言っている。

「私をだますのは、私にとっての悪魔である。もし私が報奨に値する行為を行なったならば、私を支持し給え。そして、もし過ちを犯したならば、私を悪魔から遠ざけ給え。」

悪魔に籠絡されるような人は、ムスリム全体を指導するにはふさわしくない。

また、ウマルが言った。

「アブー・バクルは思慮深い権術家ではなかった。神は、ムスリムをアブー・バクルのもたらす害からお守りになっている。そして、この悪魔との盟約に帰ろうとする者を、引き戻し給え。」

したがって、もし、ウマルが真実を語っていたならば、アブー・バクルは、専制者の1人であったことになる。もし、それが嘘であったならば、ウマルは指導者のランクにふさわしくない。

預言者は、悔悟の章のいくつかの聖句をアブー・バクルに伝え、アブー・バクルはそれをメッカまでもっていき、人々に誦んできかせた。そこでジブリエールが降天し、次のように言った。おまえ自身か、おまえと資質を同じくする者以外には、おまえの指令を復唱させてはならない、と。すると、預言者は、アリーを派遣した。アリーは道中でアブー・バクルから聖句を引継ぐと、彼自身が聖句をメッカに伝えた。聖句のいくつかさえも伝えるにふさわしくない人物が、代理者性のレベルにふさわしいはずがないということに疑いの余地はない。

また、アブー・バクルは、全く法学に関する知識に乏しかった。《父母も

子供もいない者》の亡なった場合の相続について知りもしなければ、《祖母》の遺産相続についても知識がなかったのである。さらに、盗賊の左手を切断するようにと命じたことなど、スンニー派自身が伝えていることがらもある。イスラーム法の知識のない者が、いかにして預言者の代理たりえるであろうか。

同様にウマルも法学の知識に全く欠けていた。妊婦や狂人を《石打ち》の刑に処したりなどしたのである。さらに、多額な婚資金を禁じたり、1回のむち打ち刑を100回のむち打ちと定めたりした。これら以外にも、次から次へとまちがいの法判断を下し、その多くをアリーが差し止め、ウマルはそれを受け入れて次のように言った。「もし、アリーがいなければウマルは破滅していたであろう。」さらに、多くの人々がウマルよりもイスラーム法に関する知識があり、全く社会的に隔離された女性でさえも、ウマルより知識があったと言われた。

ウマルは、《2つ同時の一時婚》を禁じた。そして、説教台の上から次のように言った。「2つの一時婚は、預言者の時代には全く許されていたが、私はこれを絶対的に禁じ、それには全く迷いがない。」

ウマルは、預言者が亡なったとき、預言者には死がおとずれないであろうと思っていたので、疑問に思った。そして、アブー・バクルは、「本当にあなたは（いつかは）死ぬ。かれらもまた死ぬのである。」（クルアーン；39：30）という聖句をウマルのために誦んだ。そしてウマルが言ったことには、「私は、この聖句を聞いたことがなかった。」というのである。

ウスマーンは、偉大な教友たちを虐待した。たとえば、アブー・ザッル・ガファーリーを打擲し町から追放し、アッマール・ヤーシルを内出血をおこすまで打擲した。

ウスマーンは、国庫の全財産を自分の近親者や部族に与え、他のムスリムには何一つとして与えなかった。

ハッドの刑が課せられねばならない2人の者を見逃して、彼らに刑を執行

しなかった。そのうちの1人は、ワリード・アカバで、飲酒した罪であり、もう1人は、アブドゥッラー・イブン・ウマルであり、ホルムズはムスリムになっていたにもかかわらず、ホルムズを不当にも殺害した罪であった。

ウスマーンの放蕩ぶりは、教友たちが、ウスマーンを不名誉に思い、殺すに至るまでのものであった。アリーは、「神が彼を殺した」とおっしゃった。また、それが呪いの祈禱であった可能性もある。すなわち、「神が彼を殺さんことを」という意味である。この場合、アリーはこの意味のことをウスマーンが殺される前に言ったのであり、そしてウスマーンが殺されたのち、3日間彼の死体は放置され埋葬されなかったのである。

スンニー派の一部には、アリーがウスマーンの殺害を画策したと告白する者がいることは、まぎれもないことである。しかし、これがいかにしてスンニー派の教義と合致するのか私にはわからない。というのは、この場合には、もちろん、彼らのうちの1人が、不正であるとなるであろうが、他方では、スンニー派は、2人ともを正当なハリーファとみなしているからである。しかし、これは不可能である。このことの真相は、スンニー派の教義の腐敗に依拠していることにみとめられる。したがって、神の御加護のもと、5つの方向からアリー・イブン・アブー・ターリブのイマーマが証明された。